内部資料
067

専門家等研修効果測定基礎調査報告書

昭和62年2月

国際協力事業団
国際協力総合研修所

総研
JR
87-2

国際協力事業団	
受入月日 '88. 3. 15	000
	36
登録No. 17291	IIC

はじめに

国際協力総合研修所（以下「総研」という。）が現在実施している派遣前の専門家等に対する研修のうち，(1)専門家派遣前集合研修（専門家夫人研修を含む），(2)派遣前専門家等中期研修，(3)技術協力総合研修（プロジェクト・リーダー／調整員コース）の3研修コースについて効果測定を行い研修の内容及び運営を抜本的に改善することとした。

その一環として昭和62年1月31日より同年2月13日までの間前記3研修コースを受講し，インドネシア及びシンガポールに派遣された長期派遣専門家及び専門家夫人を対象にアンケート調査と面接調査を行い，業務及び生活の実態を把握することにより，前記3研修コースが真に有効かつ適切なものであるかを調査した。

本報告書はその調査結果をまとめたもので専門家等研修効果測定の一助となるものである。

昭和62年2月

国際協力事業団

国際協力総合研修所

JICA LIBRARY
1041596[6]

摘要，文中は次の略称を用いた。

国際協力事業団……ＪＩＣＡ
国際協力事業団国際協力総合研修所……総　　研
専門家等研修効果測定基礎調査……調　　査
専門家派遣前集合研修……集合研修
専門家派遣前集合研修（専門家夫人研修）……夫人研修
派遣前専門家等中期研修……中期研修
技術協力総合研修（プロジェクトリーダー／調整員コース）……リーダー／調整員コース

専門家等研修効果測定基礎調査報告書

目　　次

はじめに …… 1
摘　　要 …… 2
Ⅰ　総　　論 …… 5
1.　調査概要 …… 5
2.　研修全般に関する評価 …… 8
3.　海外経験と研修に対する評価 …… 9
4.　専門家となった動機と研修に対する評価 …… 10
5.　研修の受講歴 …… 11
Ⅱ　各　　論 …… 13
1.　集合研修 …… 13
〔1〕調査結果 …… 13
Ⓐ　集合研修 …… 13
(1)　調査対象 …… 13
(2)　研修全般について …… 13
(3)　一般研修について …… 14
(4)　語学研修について …… 17
Ⓑ　夫人研修 …… 20
(1)　調査対象 …… 20
(2)　研修全般について …… 20
(3)　一般研修について …… 21
(4)　語学研修について …… 25
〔2〕改善点 …… 27
(1)　全　　般 …… 27
(2)　一般研修 …… 28
(3)　語学研修 …… 29
2.　中期研修 …… 29
〔1〕調査結果 …… 29
(1)　調査対象 …… 29
(2)　一般研修 …… 29
(3)　現地研修 …… 31

(4) 専門研修 …… 31
(5) 総　　合 …… 32
〔2〕改善点 …… 32
(1) 一般研修 …… 32
(2) 現地研修 …… 33
(3) 専門研修 …… 33
(4) そ の 他 …… 33
3. リーダー／調整員コース …… 33
〔1〕調査結果 …… 33
(1) 調査対象 …… 33
(2) 研修一般 …… 33
(3) 講義内容 …… 34
(4) 総　　合 …… 34
〔2〕改善点 …… 35
Ⅲ 専門家適性管理のあり方 …… 36
まとめ …… 37

Ⅰ 総　論

1　調査概要

(1) 背景と経緯

ＪＩＣＡが開発途上国に対する技術協力のために派遣する専門家（調査団を除く。）は，個別専門家とプロジェクト専門家を併せ，年間2,800名に上っている。

このうち長期派遣専門家の約1,300名については，原則として総研が実施する集合研修を派遣前に受講させることとしており，更に専門家に随伴する夫人についても集合研修に夫人研修を併設し実施して来た。本研修は昭和48年に開始して以来14年を経過し，その間カリキュラムと講義科目講師及び教材等については絶えず改善して来た。ちなみにＪＩＣＡ発足以来の受講者は4,000名に達している。

また，中期研修については，ＪＩＣＡ発足の昭和49年に開設して以来今日まで毎回受講者から研修内容についてアンケートを収集し，改善点を次回の研修にフィードバックする努力を続けて来た。ちなみに本研修開始以来受講者の累計は約1,400名に上っている。

更にリーダー／調整員コースは昭和52年度に開設されて以来，10年を経過し，受講者数も150名を上まわっているが，上記研修コースと同様その都度改善に努めて来た。

しかしこれら3研修コースが，ＪＩＣＡが求める技術協力専門家等の養成研修の目的に沿い赴任国での業務の遂行及び生活に真に役立っているか，かつそのために適切な養成研修の内容となっているか否かは，最終的には専門家が赴任国で研修の成果を挙げ，専門家派遣の目的を達しているか否かの効果測定が行われる必要がある。

折しも総研が設立されて3年を経過し，本年中には新しい建物に移転し，抜本的に体制を強化しようとする機会にこれら専門家等養成研修の全般的な見直しと改善を図ることは，将来の増大する技術協力事業に対処し，その効果的かつ効率的な実施をはかるうえで重要である。

(2) 調査計画

1. 目　　的

専門家等に対する研修の効果を測定し，研修の計画及び実施上の改善を図るため，長期派遣中の専門家及び専門家夫人その他現地関係者から事情を聴取し，必要な情報を収集する。

併せて研修との関連で実施している専門家の語学力カモニタリングの実施方法についても調査する。

2. 調査の内容

下記3研修コースについて次の内容を調査する。

(1) 研修全般に関する評価

(2) 海外経験の有無と研修に対する評価

(3) 専門家となった動機と研修に対する評価

(4) 集合研修に対する評価

イ 一般研修

ロ 語学研修

(5) 夫人研修に対する評価

(6) 中期研修に対する評価

イ 一般研修

ロ 専門研修

ハ 語学研修

ニ 現地研修

(7) リーダー／調整員コースに対する評価

3. 調査方法

インドネシア及びシンガポールに長期派遣中の専門家及び専門家夫人のうち，一定数の者に質問表（別紙１）を配布し，回答を得た者について可能な限り全員に面接し，事情聴取を行う。

併せてＪＩＣＡ事務所等関係者の意見も聴収する。

4. 調査時期

昭和62年１月31日～２月13日

5. 調査チーム

国際協力総合研修所長　　長谷川　正　男

国際協力専門員　　秋　山　伸　一

(3) 調査日程

（次ページ調査日程表参照）

(4) 調査の結果

1. 本件調査は専門家及び専門家夫人はもとよりＪＩＣＡ事務所及びインドネシア・シンガポール両国のプロジェクト責任者の協力により円滑に行れた。

調査内容は第１表のとおりインドネシア及びシンガポールに派遣中の長期専門家 222 名（インドネシア 184 名，シンガポール38名）中58名から回答を得，48名に面接した。

また専門家夫人について32名から回答を得，うち21名に面接した。

以下統計的数字は回答数を基礎とし，意見については回答及び面接の結果を基礎としている。

2. 調査結果を総合すれば，３研修コース（夫人研修を含む）についてはそれぞれ有意義乃至有用であるとの結論となった。

ただし，研修内容の細部については検討すべき多くの点を指摘することが出来，また研修の運営に当っても配慮すべき若干の点が挙げられる。

3. 専門家適性管理にかゝるモニタリングについてＪＩＣＡインドネシア事務所の意見は検討に値するものであった。

調　査　日　程　表

月日	曜	午　前	午　後
1／31	土	東京発→ジャカルタ着	
2／1	日	ＪＩＣＡインドネシア事務所との打合わせ・意見交換	
2	月	ＣＥＶＥＳＴ	
3	火	灌漑排水センター	個別専門家・夫人との面談
4	水	ジャカルタ発→ジョクジャカルタ着	火山砂防センター（含夫人）
5	木	ラジオ・テレビ放送センター	同　左
6	金	ジョクジャカルタ発→ジャカルタ着	ＪＩＣＡインドネシア事務所
7	土	調査資料整理	
8	日	ジャカルタ発→メダン着	
9	月	スマトラ化学	同　左
10	火	メダン発→シンガポール着	ＪＩＣＡシンガポール事務所
11	水	生産性向上プロジェクト	同　左
12	木	日ソフトウエアー技術研究センター	個別専門家・夫人との面談
13	金	シンガポール発→東京着	

第１表　調査対象専門家及び専門家夫人数

国　名	区　分	長期派遣専門家数	回答数	面接者
インドネシア	（プロジェクト専門家）	１２１	３２ (18)	２４ (9)
	ＣＥＶＥＳＴ	１４	１１ (7)	３ (2)
	灌漑排水	５	４ (2)	４ (1)
	火山砂防	４	４ (4)	４ (3)
	ラジオ・テレビ	７	７ (4)	７ (2)
	スマトラ	６	６ (1)	６ (1)
	その他のプロジェクト	８５	０	０
	（個別専門家）	６３	１０ (8)	８ (7)
	計	１８４	４２ (26)	３２ (16)
シンガポール	（プロジェクト専門家）	３２	１２ (4)	１２
	生産性向上	１１	７ (2)	７ (1)
	ソフトウェアー	１２	５ (2)	５ (2)
	技術学院	９	０	０
	（個別専門家）	６	４ (2)	４ (2)
	計	３８	１６ (6)	１６ (5)
	総　計	２２２	５８ (32)	４８ (21)

（　　）内は専門家夫人で外数

2　研修全般に対する評価

(1)　今回の調査の結果，調査対象となる3研修コース（夫人コースを除く。）について「大変有意義」と答えた者は17名（29.3％）であり，「有意義」と回答した者34名（58.6％）を併せると87.9％の者が肯定的に回答している。

大変有意義または有意義である理由として　①今まで知らなかった関係分野の知識が与えられた。②特に開発途上国については業務上も生活上も必要であり，これについて各般の知識情報が与えられた。③語学については非常に有用であった。

(2)　反面少数ではあるが，「普通」と回答した者が7名（12.1％）おり，その理由としては6名が研修の内容及び運営について若干の疑問乃至意見があるとしており，1名については，業務研修の一部を受講したに止まるからとしている。

第2表　研修全般に関する調査結果

	インドネシア		シンガポール		計	
1. 大変有意義	11	26.2 %	6	37.5 %	17	29.3 %
2. 有　意　義	25	59.5	9	56.2	34	58.6
3. 普　　通	6	14.3	1	6.3	7	12.1
4. 有意義でない	0	—	0	—	0	—
5. やらないほうがよい	0	—	0	—	0	—
回答数計	42	100.0	16	100.0	58	100.0

(3)　研修全般についての意見

研修期間，内容の選択や配分，実施の方法等全般的な意見は以下のとおりであるが，回答者の大部分が集合研修のみの受講者であることから意見の殆んどは集合研修に関するものとならざるを得なかった。

1. 語学については大変役立っている。その他については任国事情を別として矢張り任国で経験の中から学ぶことが多い。
2. 全体的に語学研修を増して欲しい。(2)
3. 集合研修でインドネシア語が開講されなかったことが，着任後10ケ月間影響した。手ほどきだけは受講したかった。
4. 語学研修は有難いがテストの実施はどうか，その活用もよくない。
5. 現地語は1人でも開講して欲しい。
6. 語学を2ケ国語受講できるようカリキュラムを組んで欲しい。
7. 研修受講は派遣時期との関連で選択方式にして欲しい。
8. 調整員には特に経理，物品管理の指導を強化されたい。

9、 集合研修の研修期間を10日程度延長して欲しい（2～3ケ月必要の意見あり）

10、 配布される資料を十分に活用した講義や説明を希望する。

11、 集合研修の業務研修は派遣前3～4ケ月前にして欲しい。

12、 派遣後の国内研修が必要と思われる。

13、 専門別の先輩がレクチャラーとなることを考えてはどうか。

14、 配布資料の様式の統一化規格化を図って欲しい。

15、 講師によって講義に濃淡・過少の差があった。

16、 講義に海外共済会の話が欲しかった。

17、 大学の先生以外の講師には事前に十分な打合せを行った方が効果的である。

18、 ケース・スタディーは業務内容・地域別にグループ分けをした方がよい。

19、 中根教授の「国際協力研究誌」総説の内容は講義としても考えた方がよい。

20、 シンガポール等の中進国とアフリカ等では事情が違いすぎるので講義の内容も区別した方がよい。

21、 派遣国（シンガポール）の個別事情はもっと詳細に知りたい。

22、 研修室の椅子，机等人間工学上の配慮が必要。

3 海外経験と研修に対する評価

(1) 回答者中，今回の派遣前に海外での業務経験のある者が31名（53.4％）と過半数を占めていることは，現在の各種研修が初めて海外に専門家等として派遣されることを前提としているだけに注目すべき点である。

なお，海外経験の回数別内訳を見ると次のとおり，

1回	13名
2回	5名
3回	2名
4回	4名
5回以上	7名

(2) 海外経験の有無により研修に対する評価は異っており，海外経験者の方が現行の研修に対し，高い評価をしている。即ち，海外経験者で，研修が「大変有意義」と回答した者が12名（70.6％）と経験のない者5名（29.4％）を大きく上回っている。また「有意義」と回答した者を併せると海外経験者27名（87.1％），経験のない者24名（88.8％），とほぼ同じとなる。

特に「大変有意義」と回答した者17名中7名（42.1％）が海外経験1回の者であることは特筆出来よう。

第3表　海外経験の有無と研修に対する評価

	海外経験者		海外無経験者		計	
1. 大変有意義	12名	38.7 %	5名	18.5 %	17名	29.3 %
2. 有意義	15	48.4	19	70.4	34	58.6
3. 善通	4	12.9	3	11.1	7	12.1
4. 有意義でない	0	0	0	0	0	0
5. やらないほうがよい	0	0	0	0	0	0
計	31	100.0	27	100.0	58	100.0

4　専門家になった動機と研修に対する評価

(1)　専門家になった動機は複数回答が可となっている関係上，回数人数とは一致しないが第4表で明らかなように③組織・上司の勤めによるものが44名（41.5％）と圧倒的に多く，以下①技術協力への参加意識26名（23.6％），②海外勤務への興味20名（18.9％）の順となっている。

設問のうち，②海外勤務への興味，⑤海外生活を体験したい，⑥赴任国への興味は同質のものと見ることが出来るのでこれらを併せると27名（25.5％）となり，①技術協力への参加意識とほゞ同数となる。

なお，⑦その他の5名（4.7％）の動機としては，ⓐ国内での仕事のマンネリ化を排するため，ⓑ仕事の行き詰まり，ⓒ初めは興味から後で働き甲斐を感じて，ⓓ他の組織から要請を受けて，ⓔ所属組織の海外志向の一環として，であった。

(2)　専門家になった動機と研修に対する評価との関連について見ると，第5表のとおりであり，①技術協力への参加意識を動機としている者程研修に対して高い評価を示している。

一方③組織・上司の勧めのみが専門家になった動機の者が19と圧到的に多い数字となっているのは現在の専門家の平均的なあり方を示すものであろうが，これら専門家が研修に対して比較的高い評価を与えていることに注目すべきであろう。

第4表　専門家になった動機

項目	人数	率
①　技術協力への参加意味	25名	23.6 %
②　海外勤務への興味	20	18.9
③　組織・上司の勧め	44	41.4
④　収入の増加	5	4.7
⑤　海外生活を体験したい	6	5.7
⑥　赴任国への興味	1	1.0
⑦　その他	5	4.7
計	106	100.0

第5表　専門家になった動機と研修に対する評価

項　　目	大変有意義	有意義	普　通	有意義でない	やらないほうがよい	計
1	2	3	1	0	0	6
1、2	1	0	0	0	0	1
1、2、3	1	2	1	0	0	4
1、2、3、4	2	0	0	0	0	2
1、2、3、4、5、6	1	0	0	0	0	1
1、2、3、7	0	1	0	0	0	1
1、2、7	0	1	0	0	0	1
1、3	2	3	0	0	0	5
1、3、4	0	1	0	0	0	1
1、3、5	1	0	0	0	0	1
1、3、7	0	0	1	0	0	1
1、4	0	1	0	0	0	1
2	2	1	0	0	0	3
2、3	1	4	0	0	0	5
2、3、7	0	1	0	0	0	1
2、5	1	0	0	0	0	1
3	3	14	2	0	0	19
3、5	0	2	1	0	0	3
7	0	0	1	0	0	1
計	17	34	7	0	0	58

注.
1. 技術協力への参加意識
2. 海外動勢への興味
3. 組織・上司の勧め
4. 収入の増加
5. 海外生活を体験したい
6. 赴任国への興味
7. その他

5　研修の受講歴

(1)　回答者の全員が，研修コースの全部または一部を受講しているが，コース別に見れば第6表のとおりである。

まず集合研修については，1人を除いて①a.業務＋語学を受講した者が47名（82.8％）であり，b.業務のみの者9名（15.5％），c.語学のみの者1名（2.7％）となっている。
更にこれらの中には2回以上受講した者が10名（3回が2名）おり，そのうちa.業務＋語学が7名であり，b.業務のみが1名，c.語学のみが2名であった。

(2)　中期研修受講者は10名であるが，全員集合研修を受講している。

(3)　リーダー／調整員は6名でうち5名が集合研修を受講している。

(4)　その他1名が個別研修を，他の1名がその他の研修を経験しており，2名とも中期研修・集合研修とリーダー／調整員コース・集合研修の受講者であった。

第6表　研修受講歴

区　　分	回答数	備　　考
1．集合研修	57名	
a. 業務＋語学	48	5名がaを2回、1名がb、3名がc(うち2名はcを2回)をそれぞれ受講
b. 業務のみ	7	1名が2回受講
c. 語学のみ	2	
2．中期研修	10	全員が集合研修を受講
3．リーダー／調整員コース	6	1名は本コースのみ　5名は集合研修を受講
4．個別研修	1	集合研修、中期研修を受講
5．その他の研修	1	集合研修、リーダー／調整員コースを受講

II 各　論

1. 集合研修

〔1〕 調査結果

Ⓐ 集合研修

(1) 調査対象

集合研修に関するアンケート回答数は58，うち面接者数は48，その国別，所属先別内訳は第7表の通りである。

第7表　調査対象者

国	地域	所属		アンケート回答者数	面接者数
インドネシア	ジャカルタ	CEVEST	中小企業	3	1
			職業訓練	8	2
		かんがい排水センター		4	4
		個別派遣専門家		10	8
	ジョクジャカルタ	火山砂防センター		4	4
		ラジオテレビ放送訓練センター		7	7
	メダン	スマトラ化学プロジェクト		6	6
小計				43	32
シンガポール	シンガポール	生産性向上プロジェクト		7	7
		ソフトウエア技術研究センター		5	5
		個別派遣専門家		4	4
小計				16	16
合計				58	48

(2) 集合研修全般について

総じて集合研修が有意義であったという点については面接者全員の認める所である。有意義であるとした理由は，次の5点に要約される。

1. 国際協力の総合的理解に役立った。
2. 業務を遂行する上で役に立った。
3. 語学力向上に役立った。
4. 海外で実生活をおこなう上で役立った。
5. 仲間意識が生まれ，専門家間の協調に役立った。

集合研修全般に関わる問題として以下に記すいくつかの点が指摘されている。

1. 研修の時期と派遣時期との間には少なくとも3～4ケ月の時間がほしい。
2. 研修の時間帯について，朝から夕方まで毎日しばられることはむりな面もある。特に語学日程をすべて集中的にこなすことは困難。クラスを小分割して数人で数時間（或は1人1～2時間などもありうる）というような形にならないか。

3. 研修環境について，騒音，温度調節ならびに，机，椅子の人間工学的な工夫など改良の余地がある。

4. 内容について

イ） 地勢的な情報を。

ロ） 使用人の雇用条件のマニュアル化。

ハ） 人事管理，人間管理のコマがあってもよい。

ニ） 客観的で最新かつ正確な情報を提供できる講師の人選。

ホ） 物品購入場所までの情報を提供する必要はない。

ヘ） その人から情報を得られるという人を紹介する制度を取り入れては如何。

5. その他

① 赴任相談室が時間の関係上利用出来ないので別途「心配事コーナー」を設けることが望ましい。

② ＪＩＣＡのインドネシア語の検定試験は，新聞の読解力が目標となっているが，それでは実情にそっていない。

③ 専門家に対して ＪＩＣＡは甘い。まず健康でと言うことは不適，寧ろ大いに仕事やって来いと言うべきである。

(3) 一般研修について

集合研修において実施されている業務研修の各項目ごとにその内容が赴任後役に立っているかという質問に対する回答を出していただいた。その結果は第８表の通りである。

この表を一見して明らかなことが２つある。その１は「協力活動」のうち「活動事例について」

第８表 一般研修項目別調査結果

		インドネシア				シンガポール				計			
	役に立っているか→	はい	いいえ	計	「はい」率	はい	いいえ	計	「はい」率	はい	いいえ	計	「はい」率
国際協力	①わが国の経済協力	35	4	39	89.7%	12	3	15	80.0%	47	7	54	87.0%
	②JICAの役割	37	2	39	94.9	14	1	15	93.3	51	3	54	94.4
	③専門家派遣の仕組み	36	4	40	90.0	14	1	15	93.3	50	5	55	90.9
	④専門家と関連事業	31	7	38	81.6	11	2	13	84.6	42	9	51	82.4
	⑤専門家の処遇について	36	3	39	92.3	13	1	14	92.9	49	4	53	92.5
	小 計	175	20	195	89.7	64	8	72	88.9	239	28	267	89.5
協力活動	①活動指針	30	6	36	83.3	12	1	13	92.3	42	7	49	85.7
	②活動事例について	27	9	36	75.0	10	3	13	76.9	37	12	49	75.5
	③担当との打合わせ	36	3	39	92.3	12	1	13	92.3	48	4	52	92.3
	小 計	93	18	111	83.7	34	5	39	87.2	127	23	150	84.7
開発途上国	①異文化理解	34	5	39	87.2	11	1	12	91.7	45	6	51	88.2
	②任国事情	35	6	41	85.4	14	1	15	93.3	49	7	56	87.5
	③健康管理	35	6	41	85.4	12	1	13	92.3	47	7	54	87.0
	④安全対策	34	4	38	89.5	11	2	13	84.6	45	6	51	88.2
	⑤海外子女教育	21	3	24	87.5	8	0	8	100.0	29	3	32	90.6
	小 計	159	24	183	86.9	56	5	61	91.8	215	29	244	88.1
計		427	62	489	87.3	154	18	172	89.5	581	80	661	87.9

という項目の「はい」率が低いこと，その2は「開発途上国」という関係の各項目についてはシンガポールの専門家に比し，インドネシアの専門家の「はい」率が低いことである。面接調査結果ではこれらについて前者は自らの業務と無関係な内容が多かったこと，後者はインドネシアでは生活の現実と合致しない内容が多くあったことを指摘しているのに対し，シンガポールでは生活の現実には無関係なことが多く知識として役立ったということが指摘されている。

以下に面接調査結果およびアンケート調査結果得られた各項目に関するコメントを記す。

1. 「国際協力」について

a）「我が国の経済協力について」

- 相手国から日本の協力の理念を聞かれることがある。理念についてわかりやすく説明してほしい。
- 経済協力の話は本に書いてあることも多いのでなくともよい。
- 専門家として派遣されることになりはじめて国際協力の分野にふみこんだのでこの項目は大変役に立った。
- 派遣専門家として海外に出てゆく際の心がまえをつくる上で大変印象深かった。

b）「ＪＩＣＡの役割」「派遣のしくみ」「関連事業」について

- 全体的なアウトラインがわかるのでよい。
- 関連事業の話は具体的かつ詳細な話ではなかった。
- プロジェクトリーダーにとっては不必要なものもあり重複をさける意味で選択制にすることが望ましい。
- 民間ベースで海外に進出することとは異なり政府の代表として仕事をするのだという自覚をより強くもたせるよう内容の工夫がほしい。

c）「処遇」について

- 短時間で簡単に説明されたのみであったが個々人にとっては重要なことなのでもう少し念入りに話をしてほしい。あとで読めということでは派遣のせまっている時期で多忙なので無理な面がある。

2. 「協力活動」について

a）「活動指針」について内容が一般的で具体的でなかったが，各プロジェクトあるいは各専門家により様々なので一活した話にするのは困難なのではないか。

b）「活動事例」について

- 自分の担当分野と異なっており参考にならなかった。
- 自分と同一分野の先輩から話をきくべきである。
- 講師は厳選すべきである。講師の話が一面的にすぎた。
- 専門が全くちがうのでこの項はなくともよかった。

c）担当部との打合わせは時間がなかった。

3. 「開発途上国」について

a）「異文化理解」

- 講師の見方が片寄っていないか。
- 民族感情についてあらかじめ十分知っておく必要あり。
- 赴任先によってそれぞれ文化の内容が異なる。それぞれに合った具体的な話でないとあやまった理解ができ上がってしまう。
- mentality のちがい，行動様式のちがいなど異文化の具体例を国別に分けた情報として提供してもらえないか。

b）任国事情

- 講師の先入観が入りやすくまた重点のおきどころがちがうと話が異なってくる。人選をしっかりやる必要あり。
- 常に新らしい情報を提供してほしい。
- 任国の国内でも地域によって大いに異なるので，場合によっては，地域別情報が必要となる。
- インドネシアの行政組織および仕事の流れについての情報が事前にほしかった。
- 現地の慣習や慣例（マナー，エチケットも含めて）についてもきゝたい。
- 情報を提供するには限度があると思う。心がまえを教えるという方向で良いのではないか，項目を整理しては如何。
- 自分の赴任国以外の情報は派遣前の多忙時にはかえってmis-leading のもとになる。
- 視聴覚を用いて具体的視覚的に赴任国の状況をつかめるようにしてほしい。（自分でさがして見ておくようになっているが，これは事実上無理である）。
- 任国におかれている世界的位置，経済状況，人間の物の考え方などを知りたい。

c）健康管理

- 一般的な話は役に立たない。かといってアフリカの具体例を話されてもインドネシアの場合とは合わない。赴任国に合った医療事情と病気等の内容がまとまった情報になるとよい。
- 日常の体力づくりが最も大切だということをもっと教えるべきであり，危険が大きいことを over に話すと萎縮する懼れあり。
- 悪い例を挙げるだけでなく病名もわからないときの症状別対処法を教えるべきである。
- 数量的データーがあれば有効である。
- シンガポールではマラリア，コレラの話などは不要。
- 医学百科辞典というような，何かおかしくなったときにすぐ役立つものを紹介してほしい。

d）安全対策

- 安全は地域によって事情が異なるので，一般論は不可。
- 用心するにこしたことはないので，強調しすぎてもよい。
- インドネシアの場合アフリカの話できいたものとはちがう点が多い。またジャカル

タとジョクジャカルタでも大いに異なる。

e）子女教育

- 常に最新の正確な情報がほしい。
- 国別の話が不可能であれば世界各国の日本人学校の概要がわかる資料の配布が望ましい。

(4) 語学研修について

語学に関する現況調査結果は第9表の通りである。

第9表　語学に関する現況

		インドネシア				シンガポール			
		業務上		日常生活		業務上		日常生活	
使用言語	英語のみ	21	48.8 %	1	2.3 %	15	100.0 %	12	80 %
	英語に多少現地語	5	11.6	6	14.0	0	—	3	20
	英語現地語半々	10	23.3	8	18.6	0	—	0	—
	現地語が主	7	16.3	23	53.5	0	—	0	—
	現地語のみ	0	—	5	11.6	0	—	0	—
	回答数　計	43	100.0	43	100.0	15	100.0	15	100.0
現地語の必要性	大きい	11	52.4 %	18	85.7 %	0	—	1	6.7 %
	小さい	10	47.6	3	14.3	15	100.0	14	93.3
	回答数　計	21	100.0	21	100.0	15	100.0	15	100.0

これを見ると，業務上英語のみを用いている者は，シンガポールでは全員（100％）であるのに対し，インドネシアでは48.8％と半数以下である。逆に英語現地語半々および現地語が主と答えた者の数は合わせて39.6％にのぼる。日常生活でもインドネシアでは現地語を用いる者の比率が高く，現地語が主であるとした者が53.5％，これに，英語現地語半々と答えた者を加えると全体の72.1％に達する。一方シンガポールでは現地語を多少使っているという者が20％（15人中3人）いるが，この場合は，必要にせまられて使用するというよりもむしろ中国系，マレーシア系の人たちとのコミニケィション上使った方がbetterという考えによって使っていることをあらわしたものである。

以上をふまえて現地語の必要性については，インドネシアでは必要性大と考えている人が業

第10表　現地語の習得および語学学習状況

項目		インドネシア				シンガポール			
現地語の習得	JICA以前	2		4.7 %		1		100.0 %	
	JICA研修	11		25.6		0		—	
	赴任後	30		69.7		0		—	
	回答数　計	43		100.0		1		100.0	
赴任後語学の学習を		英語		現地語		英語		現地語	
	していた	3	8.3 %	22	56.4 %	1	9.1 %	0	— %
	している	27	75.0	17	43.6	7	63.6	1	14.3
	していない	6	16.7	0	—	3	27.3	6	85.7
	回答数　計	36	100.0	39	100.0	11	100.0	7	100.0

務上 52.4％，日常生活上 85.7％と圧倒的に多い。インドネシアにおいては実際の現地語習得は第10表の如く，赴任後に家庭教師等によって特段の努力を払っておこなっている者が大変多く（69.7％），現地語を勉強していない者はゼロである。

この事業に関連し，集合研修の語学研修で英語と現地語のどちらをやってほしかったかという質問に対しては，第11表のような回答が得られた。

第 11 表　語学研修の対象語学の希望

	インドネシア		シンガポール		計	
英　　語	13	35.1％	9	90％	22	46.8％
現　地　語	5	13.5	0	—	5	10.6
両　　方	19	51.4	1	10	20	42.6
回答数　計	37	100.0	10	100	47	100.0

なお，英語研修に関するアンケート調査結果は，第12, 13表の通りである。この結果は一言で言えば実践的な英語が役に立ち，かつそれを希望する者が多いということを示すものであろう。

第 12 表　英語研修において役に立っていること

回答項目	数	回答項目	数
英会話	8	英語になれたこと	2
英作文	4	リフレッシュになったこと	2
レポート作成	4	全体的によかった	2
プレゼンテイション	4	ロールプレイ	1
文　法	3	ヒアリング	1
討　論	2	IPCS（対人コミュニケーション技能）	1
表現力	2	回答数　計	36

第 13 表　英語研修においてやってほしかったこと

項　目	インドネシア		シンガポール		計	
a. 会話表現	15	28.8％	6	35.2％	21	30.4％
b. 聞きとり	8	15.4	2	11.8	10	14.5
c. 文書作成	11	21.2	3	17.6	14	20.3
d. 読解	2	3.8	1	5.9	3	4.4
e. 語彙	5	9.6	1	5.9	6	8.7
f. 会議運営	3	5.8	2	11.8	5	7.3
g. 交渉術	8	15.4	1	5.9	9	13.0
h. その他	0	—	1	5.9	1	1.4
回答数　計	52	100.0	17	100.0	69	100.0

なお，語学研修の教材を赴任後現地で利用しているかどうかについては，第14表のような回答結果が得られている。

ただし，インドネシアの場合は現地語の研修受講者も含まれている。

第14表　赴任後の語学教材利用度

	インドネシア		シンガポール		計	
利用している	22	56.4 %	5	45.5 %	27	54.0 %
利用していない	17	43.6	6	54.5	23	46.0
回答数　計	39	100.0	11	100.0	50	100.0

語学研修に関するコメントは次の通りである。

a）現地語に関するもの

- インドネシア，ジャパンクラブ発行の "How to master the Indonesian Language" が実生活では大変役に立つテキストとなっているので多くの人が赴任後これを利用している。語学研修でもこれをテキストにしてもらえれば一貫して勉強ができて便利である。
- インドネシアに赴任する人にはインドネシア語の受講を義務づけることは如何，
- 現行のインドネシア語研修は文法に片よりすぎており実践的ではない。
- 現在のやり方でよいと思う。文法も入っていた方が理解しやすい。
- 一度現地語の経験のある者にとっては，現行の現地語研修は整理がつくという意味で仲々よい。しかし初回は文法的すぎると思った。
- 旅行会話的なものでなく，日常生活に密着したもの（運転手・女中への指示のしかたなど）を内容にした方がよい。
- 電話の会話を取り入れてほしい。
- 技術用語集を準備していただけるとありがたい。
- 希望者が1人の場合でも開講できるよう取り計らってほしい。

b）英語に関するもの

- 非常によく準備・研究されていて申し分ない。期間はもう少し長い方がよいが際限がないので勉強のポイントを示してもらえば現行のまゝでよい。
- 外人に対するためらいがなくなったという点ですばらしい体験だったがもう少し個々人がしゃべることのできる時間を多くとってくれるとなおよい。
- 10人ほどのクラスで受講したが，人数をもっと減らした方がよい。場合によっては10人×1日を5人×半日×2クラスとする考え方も成り立つ。
- 内容としては，ハイレベルの言葉だけでなく，出来るだけ毎日の生活に関するもの（女中や運転手との対話など）を取入れてほしい。
- 事例的な内容をより多く取り入れ，実際に使える文例集のようなものになるとよい。
- 議論のしかたを強化した方がよい。
- プレゼンティションなど人間対人間の問題にはビデオを十分活用してほしい。
- 途上国英語になれるのに大変時間がかゝった。途上国英語のルール（たとえばthのhがない，語尾の子音がぬけおちるetc）を多少教え，かつヒアリングの練習を入れるとよい。
- 中期研修の語学研修と重複するところがかなりあった。

- 英語の教師間にばらつきがある。
- 語学研修は派遣直前である必要はないので，派遣1ケ月前ぐらいに終るような時期に落ちついて受講したい。直前ではあわたゞしくて身が入らない。
- 語学研修を受けたらそのまゝ海外に出られるように受講は派遣直前の方がよい。

Ⓑ 夫人研修

(1) 調査対象

夫人研修のアンケート回答者数は32，うち面接者数は21，その内訳は15表のとおりである。

第15表　調査対象者

国	地域	所属	アンケート回答者数	面接者数
インドネシア	ジャカルタ	CEVEST 中小企業	0	0
		CEVEST 職業訓練	7	2
		灌がい排水センター	2	1
		個別派遣専門家	8	7
	ジョクジャカルタ	火山砂防センター	4	3
		ラジオテレビ放送訓練センター	4	2
	メダン	スマトラ化学プロジェクト	1	1
インドネシア　計			26	16
シンガポール	シンガポール	生産性向上プロジェクト	2	1
		ソフトウエア技術研究センター	2	2
		個別派遣専門家	2	2
シンガポール　計			6	5
合計			32	21

(2) 研修全般について

派遣前専門家夫人研修が，海外において実生活を送るにあたって，大変役に立っているという点で面接者全員の意見は一致していた。全般的な問題としては，次の諸点があげられる。

1. 出発まじかで，準備のために大変多忙な時期に朝から夕方までかゝる研修とかち合うことになり出席者がまゝならぬばかりでなく，せっかく研修から得られた情報も準備の中に取り入れるにはまにあわないことが多い。
2. 幼児のいる家庭では，夫人が研修を受けるに当たって保育室を設けていたゞければ子供の問題は解決するが学令（特に低学年）の子供がいる場合，朝は子供が学校に出かける前に親が家を出，夕方は子供よりおそく帰宅することになるので，全期間を通してスケジュール通り出席することは極めて困難である。時間帯の工夫がほしい。
3. 赴任後夫人が最も大変な時期は当初の3ケ月である。これをのりきるには㋑言葉の問題，㋺家をさがす問題，㋩使用人を雇う問題の3つの問題に上手に対処する必要がある。このうち㋑は語学研修の改善で対応可能とみられるが，㋺㋩については夫人研修で細かく対処

法を指導してもらいたい。少なくとも㋐㋑についての最低必要条件を箇条書きにして実例とともに教えてほしい。

4. 時間の限られた研修では，個別情報を個々に与えることには無理があるとみられるので，赴任先別の詳しい情報を研修で与えるのはほどほどにして，任地の情報を得るための質問表（ふつうの場合何をきいたらよいのかわからない）とそのような質問に答えていただける現地在住或は帰国直後の方を紹介するような方法を個別にとれる制度を作ってほしい。

(3) 一般研修について

夫人研修において実施されている一般研修の各項目ごとにその内容が赴任後役に立っているかという質問に対して得られた回答を第16表に示す。

この表にあらわれた調査結果の特徴を列挙すると次の通りである。

1. 「国際協力」，「夫人研修」，「開発途上国」の３大別で見るとそれぞれ役に立つとした者の数は全体の 87.0％，85.7％，92.4％で「夫人研修」を是とする者が多い。
2. その「夫人研修」の中では「帰国専門家夫人との座談会」が役に立っていないとする見方が若干多く，これを是とする者の割合は全体の３分の２（66.7％）となっている。
3. 次いで「開発途上国」の中の「任国事情」が役立っているとする比率が若干低い（85.2％）
4. 国別地域別にみると，上記の「帰国専門家夫人との座談会」および「任国事情」に関しては，インドネシアのジャカルタ以外の地域在住者の役立つとした者の割合がそれぞれ 57.1％，71.4％と低い。
5. 「帰国専門家夫人との座談会」についてはジャカルタ在住者も役に立つと答えた者の割合が 64.3％と低い。
6. このほかジャカルタ在住者では「国際協力」，「安全対策」，「子女教育」について役に立っていると回答した者の割合が小さい。(それぞれ 78.6％，78.6％，71.4％)

以下面接者のコメントおよびアンケート回答に記されたコメントを記すが，これらの中に上に述べた事柄に対応する理由，原因が含まれている。

a）「わが国の経済協力について」に関するもの

- 自分の主人のやっていることの理解のために是非必要であるが夫人向きの講義にしてわかりやすくしてほしい。
- この講義で眼が開けた感がある。利益のための仕事で海外に出てゆくのとはちがうのだという認識に大いに役立った。
- こうした内容については，赴任後でもわかることであり，また本で読むむこともできるので，出発まぎわのあわただしい時には本当に必要なこと（語学など）に限定してもらった方がよい。
- 主人がきいているのだから夫人はより緊急な問題についての研修が受けられるようにしてもらいたい。
- よくわからないので，この種のものも夫人コースで別途やった方がよい。

第16表　一般研修項目別調査結果

	国別	インドネシア												シンガポール				合計			
	地域別	ジャカルタ地域				その他の地域				インドネシア計											
	項目＼役立ったか	はい	いいえ	計	「はい」率	はい	いいえ	計	「はい」率	はい	いいえ	計	「はい」率	はい	いいえ	計	「はい」率	はい	いいえ	計	「はい」率
国際協力	わが国の国際協力について	11	3	14	78.6%	3	0	3	100.0%	14	3	17	82.3%	6	0	6	100.0%	20	3	23	87.0%
夫人研修	① 帰国専門家夫人との座談会	9	5	14	64.3	4	3	7	57.1	13	8	21	61.9	5	1	6	83.3	18	9	27	66.7
	② 料理と健康管理	14	0	14	100.0	5	0	5	100.0	19	0	19	100.0	5	1	6	83.3	24	1	25	96.0
	③ 専門家夫人の役割	13	1	14	92.9	5	0	5	100.0	18	1	19	94.7	6	0	6	100.0	24	1	25	96.0
	小計	36	6	42	85.7	14	3	17	81.4	50	9	59	84.7	16	2	18	88.9	66	11	77	85.7
開発途上国	① 異文化理解	13	0	13	100.0	5	0	5	100.0	18	0	18	100.0	6	0	6	100.0	24	0	24	100.0
	② 任国事情	12	2	14	85.7	5	2	7	71.4	17	4	21	81.0	6	0	6	100.0	23	4	27	85.2
	③ 健康管理	14	0	14	100.0	5	0	5	100.0	19	0	19	100.0	6	0	6	100.0	25	0	25	100.0
	④ 安全対策	11	3	14	78.6	6	0	6	100.0	17	3	20	85.0	6	0	6	100.0	23	3	26	88.5
	⑤ 子女教育	10	2	12	71.4	1	0	1	100.0	11	2	13	84.6	3	0	3	100.0	14	2	16	87.5
	小計	60	7	67	89.6	22	2	24	91.7	82	9	91	90.1	27	0	27	100.0	109	9	118	92.4
合計		107	16	123	87.0	39	5	44	88.6	146	21	167	87.4	49	2	51	96.1	195	23	218	89.4

b）「帰国専門家夫人との座談会」について

- 色々な国から帰った人から話をきけたのはよい。自分の赴任国以上に不便な国の方々の話は忍耐をする上で役立った。
- インドネシアに赴任する予定の人が何人かいたのに話し手の方にインドネシアからの帰国者がいなかった。人選に配慮がほしい。
- 大勢の人を一室に集めてやると話は一般的になるか特定の興味・関心のあるところに集中してしまいがちなので赴任国ごとにやってほしい。
- 一般的な話としてはおもしろいこともあるが，赴任する人はもっと切実な問題をかゝえてこゝに来ている。赴任国の最新の状況を教えていただけるような方式にならないか。
- 帰国後時間がたった方の話は美化されている面があり苦しかったこともなつかしい思い出として語られる傾向がある。もっと現実的な話のきける最近の帰国者による最新の正確な情報が得られるようにしてほしい。
- 最初の数ケ月をどうすごすかが最も重要なので，最初の数ケ月に起ること（家さがし，子供の学校，使用人の雇用など）についてのその国の状況をお話し願いたい。
- はじめて海外に出かけるにあたってきく話なので，どれが自分のケースに当てはまるのかを適確につかむことはむづかしい。従って，事情の異なる国々の話をきくと不安になったり迷いが生じたりするので赴任国の話だけきけるようにしていたゞくのがよい。
- 話の中には様々な形で極端な面を浮き彫りにしたようなものがある。住宅や衣服や食事のような生活の基本になるものは国によって事情が異なるはずなので，１人の方の特殊な経験から極端な結論の出るような話にならないように配慮してほしい。
- 赴任国別の座談会の方が能率的に情報を得られる。
- この座談会は準備をするに当たっての心がまえができる所だと思えば情報をこゝで入手しょうというせっぱつまった気持でなく話をきける。情報の入手のためには別途適切な人を紹介する制度をつくってほしい。

c）「料理と健康管理」について

- 鳥のさばき方を教えていただいたが全く必要がない。かりに必要があったとしても女中にさばかせるのがふつうなので現地語でそれを指示命令する方法を習った方がよい。
- 研修の中から時間を減らすとすればこのコマは第一候補になる。鳥のさばき方が必要である国が何ケ国あるのか調べては如何。
- 現地では苦労して日本食を作ることが多い。料理の講習はなくともよいのではないか。
- 鳥のさばき方は必要性はないが日本で全くやったことがないのでおもしろかった。わざわざ実際にやってみて楽しんでいる。

- 料理の知識としてはおもしろい。注意点などは役にも立っている。しかし，任国に合った話にした方がよい。
- 食物の材料が急に市場からなくなるとか，マヨネーズの値段が一夜にして法外な値上がりをするとか，異常なことが色々ある。こういうことを前もって教えてもらう方がよい。
- 健康管理の問題については役に立っていることが多い。

d）「夫人の役割」について

- 大変なことだと感じた。しかし現実にはこの講義にあるような大げさな場面には出合っていない。
- 大げさすぎる。まず現実の日常生活における心構えが重要であり，客に対する対応方法ばかり印象に残るような話はまづい。
- 任地の前任者などに実際にどういう生活になるのかをきくことができれば大げさな一般論にまどわされずにすむ。
- 年配の方と若い世代では状況が異なる。

e）「異文化理解」について

- 予備知識としてちょうどよいと思う。
- 腹の立つ率をへらすのに役に立った。具体例をたくさんあげて実際の異文化との触れ合いの場を前もって理解させてくれるとよりbetter。
- あまり一般論になると自分とどこまで関係があるのかわからなくなってしまう。

f）「任国事情」について

- 自分の住む所がどんな所で衣食住の条件が日本とどうちがうかを具体的に知り，準備に役立てたいと思ったが，どうもはっきりせずはがゆかった。
- 最新の正確な情報がほしい。ジャカルタのように何んでも手に入るようなところでは，必要なもので本当に手に入らないものが何であるかを的確に教えてほしい。
- 話の内容の重点の置き所が異なると理解がちがってしまうので断定的な話は避けてほしい。
- 話の内容の重点の置き所が異なると理解がちがってしまうので断定的な話は避けてほしい。
- 実生活に関する事情だけの情報を集めて「任国事情奥様版」というのを作ってくれないか。
- ジャカルタと地方では全く異なるのだということを同じインドネシアの中だから大差ないと思いがちな人に徹底的に教えてほしい。
- 「ジョクジャカルタ事情」というようなものがあってもよい。
- 赴任国の生活実態をくわしくスライドやビデオで視覚的に情報提供してほしい。実際の日本人の生活を追跡したビデオを作ってもよいではないか。

g）「健康管理」について

- 最も関心の高い問題なので具体的に任国別に教えてほしかった。はだしはだめ，ということで長ぐつをもってくることをすゝめられたが全く使うことはない。
- 話をきいて大変こわいと思った。知っておくという意味では多少大げさになっても良いと思う。
- ふだんの体力を養うには任国でどうしたらよいかというような話ももっと入れてほしい。病気になる前の日常生活の注意点などの方が重要と思う。
- 病名と対応するクスリの話をきいたが現地では病名などはわからないまゝ何かしなければならぬことが多いので，病状に対してどういうクスリを与え，どうすればよいかということを教えてもらった方がよい。

h）「安全体策」について

- 治安の悪さについて研修でおどかされてきたので多少のことはおどろかないですむ。早速犬を飼った。
- 交通事情が大変ひどく危険である。接触事故を起したが現実的な対処法を事例で教えておいてほしかった。
- 任国によっても或はインドネシアの場合だと地方によっても安全対策は強調すべきポイントが異なる。国別事例集を作ってくれると大変参考になると思う。

i）「子女教育」について

- 任地に来てからは日本の教育情報がほしい。これを入手する方法を種々教えてほしい。
- 帰国子女受入れ事情について，帰国が近くなった時期に情報がほしい。（赴任時のものは古くなっている可能性あり）
- 土地別にどのような学校があるのかをあらかじめ知っておけば子供をつれてくるかどうかを判断できる。
- 子供は外では遊べないとか，家はスクールの停留所の近くにすべきとか上ぐつ，ブルマー，習字道具がないとか教育にまつわる現地の事情をこまかく教えていただけるような方法がとれないか。（ジャカルタの場合）

(4) 語学研修について

語学に関する現況調査結果は第17表の通りである。

インドネシアにおいては日常生活が現地語なしではありえないこと，他方シンガポールでは現地語の必要が全くないことがこの表によく表われている。

インドネシア在住の専門家夫人の現地語学習の状況は第18表の通りである。インドネシアにおいては，赴任後に家庭教師等によって特段の努力を払って現地語習得にはげんでいる者が多いことをはっきり示している。

第17表　語学に関する現況

		インドネシア		シンガポール	
日常生活における使用言語	英語のみ	0	— %	4	— %
	英語に多少現地語	0	—	2	—
	英語現地語半々	0	—	0	—
	現地語が主	9	—	0	—
	現地語のみ	14	—	0	—
	回答数　計	23	100.0	6	100.0
現地語の必要性	大きい	3	100.0 %	0	— %
	小さい	0	—	5	100.0
	回答数　計	3	100.0	5	100.0

第18表　現地語の習得および語学学習状況

		インドネシア				シンガポール			
現地語の習得	JICA以前	0	— %			0	— %		
	JICA研修	5	19.2			0	—		
	赴任後	21	80.8			0	—		
	回答数　計	26	100.0			0	—		
赴任後語学の学習を		英語		現地語		英語		現地語	
	していた	1	16.7 %	2	13.3 %	1	20.0 %	0	%
	している	2	33.3	12	80.0	4	80.0	0	
	していない	3	50.0	1	6.7	0	—	1	100.0
	回答数　計	6	100.0	15	100.0	5	100.0	1	100.0

集合研修の語学研修において英語と現地語のどちらをやってほしかったかという質問に対しては，第19表のような回答がえられた。

第19表　語学研修の対象語学の希望

	インドネシア		シンガポール	
英語	0	— %	4	100.0 %
現地語	3	27.3	0	—
両方	8	72.7	0	—
回答数　計	11	100.0	4	100.0

ただし，専門家夫人の場合実際に語学研修を受講した者の数は，インドネシア3名(26名中)，シンガポール3名(6名中)にすぎない。インドネシアの3名中2名はインドネシア語の研修受講者である。

英語研修受講者4名について，研修において最も役に立ったことは何であったかという質問の回答は，会話2，心がまえが出来たこと1および全般的に役立った1であった。また，英語研修においてやってもらいたかったことは，会話表現4，聞きとり1と回答している。

語学研修のテキストを赴任後利用している者の数は，第20表の通りである。ただし，この「テキスト」には一般研修でおこなわれた1日だけの語学学習のテキストも含まれていることを注記する（特にインドネシア語)。

第20表　赴任後の語学教材利用度

	インドネシア		シンガポール	
利用している	7	63.6	2	66.7
利用していない	4	36.4	1	33.3
回答数　計	11	100.0	3	100.0

語学研修に関するコメントは次の通りである。

- 語学研修を主婦が毎日終日受けるということは困難なので半日コースにするなどの方策がとれないか。
- 現地語コースは希望者が3人以上集まらないと開かれないことになっているが，現地語の必要性緊急度から言うと1人でも是非やってほしい。
- 一般コースの中に1日だけの語学研修があり大変役に立った。これを2～3日にしてもらえると大変ありがたい。
- 内容的には，女性だけのクラスを設けて日常生活用語（特に女中を使う時のやりとりなど）をやってくれるとよい。
- 文法も多少はあってもよいが，日常実用的な会話を多くしてほしい。
- 語学研修は気おくれしないようになるという点が最大の収獲だが夫人むけの料理・台所・女中・病気などの会話を入れるとよりbetter。
- 現地語に関して言えば，赴任して3ケ月ぐらいの間に生活の基盤を作ることになるので，この落ちつくまでの間に必要な会話なり単語なりを出来るだけたくさんつめこんでほしい。
- 文法は3ケ月たってから家庭教師につくなどきちんと勉強することになるので，最初の3ケ月間に必要な単語・単文集を作ってくれるとありがたい。
- 女中をおどかしたり，もち上げたりの動かし方を語学の教材の中に取り入れてほしい。
- 接頭辞の問題は最初は全く不要，女中にこれはやってはダメというような言い方をとにかくいくつか教えておいてほしい。

〔2〕 改善点

(1) 全　　般

集合研修が途上国での業務遂行および生活に十分役に立っているばかりでなく，専門家相互の連帯にも役立っている点でその意義は十分あることが認められた。

しかし，多くの場合，派遣の時期と研修受講の時期との間の時間が極めて短いため，赴任準備に多忙であるなどの現由から十分集中的に受講することがむづかしいという問題がある。

特に語学の場合は全く受講できないか，終日受講は困難とする者が多く，なるべく多くの人が受講できるようにする工夫（半日コースの開設など）が必要と考えられる。

集合研修の期間および内容構成に関してはおゝむね現行のまゝでよいが「帰国専門家夫人

との座談会」については検討の余地がある。集合研修の個別カリキュラムに関しては次の諸点を改善すべきである。

(2) 一般研修

a）「国際協力」の各項目について

- 専門家および専門家夫人にとって，業務上あるいは生活上直接役に立つものではないとしても，ＪＩＣＡ派遣の専門家およびその夫人にとっては研修すべき必須の分野である。しかし，「わが国の経済協力について」，「専門家と関連事業について」は特に簡明に説明しないと記憶に残らないおそれがある。
- 「国際協力」に関する講義がなぜ専門家および専門家夫人にとって必要であるかという説明を最初の段階でおこなうことが重要である。

b）「協力活動」の各項目について

- 活動事例は講師の赴任国，専門分野に片寄り勝ちであり，他の赴任国，専門分野の専門家にとっては他人事，講師の自己ＰＲとして受取り勝ちになるので，特に「事例研究」は他の科目にふりかえた方がよい。
- ＪＩＣＡ担当者の打合せと総研における上記講義との重複はないか検対し，必要あれば更に１コマ分の時間をさくことも考慮すべきではないか。（別途要検討）

c）「開発途上国」の各項目について

専門家および専門家夫人にとって最も必要かつ関心度の高い講義であり①～⑤の項目は実際には「任国事情」に集約されると見ることもできる。

① 異文化理解は講師の見方，考え方を特殊なものと受取られる危検があるので講義内容を更に一般化するか，類似のテーマで１コマ増やすことを検対すべきである。

② 任国事情はたとえばインドネシアであればジャカルタのみでなく主要都市，地域に亘る事情説明の出来る者，かつ最も新しい情報を詳細に亘り説明出来る者に限定すべきで人選を慎重に行うべきである。

③ 健康管理（内科，風土病），④安全体策，⑤子女教育も一般的な講義では適当でなくせめて地域別，出来れば国別の事情説明（資料によることでもよい）がなされるべきである。健康管理では病名とクスリという形ではなく症状と対応策というような実際的具体的内容に重点をおくような工夫が必要。

d）「夫人研修」の各項目

① 「帰国専門家夫人との座談会」は（イ）従来方式を踏襲するが話の内容をひとつひとつどの国のどういう状況における問題であるかを明確にするなど話し手の態度を限定的にするか，あるいは（ロ）国別または地域別のクラス分けをして，その国なり地域なりの具体的個別的情報を入手する場にするか，いづれかに方針をはっきりさせる必要がある。

② 「料理と健康管理」では，料理の方について，たとえば鳥のさばき方を教えておく必要がある赴任国がどのくらいあるかなど，内容のチェックをおこない内容についての再

検討をする必要がある。

③ 「専門家夫人の役割」についても一般的な問題提起でなく，世代のちがい，任国によるちがいを加味してより具体的実際的な内容となるような工夫が必要である。

(3) 語学研修

1. インドネシアは特殊とも言えるが専門家及び専門家夫人にとって現地語は業務上及び生活上も必要かつ有用と言えるので，3名未満でもインドネシア語コースを設けるよう努めること，インドネシアが赴任国で英語コースを受講する者もインドネシア語の学習法及びテキスト（緑，赤，茶色の3種）を提供し，赴任後の学習の便宜をはかることが望ましい。
2. 現行のインドネシア語コースでは文法に重点がおかれすぎているので実践的会話に重点をおきかえることが望ましい。
3. 英語，インドネシア語ともに語学検定受験のことを念頭においた研修が望ましい。
4. 特に英語の補講は重要かつ有用でありできれば研修後日本で引き続き補講をおこなうことが望ましく，不可能の場合は赴任後の学習方法について「任国事情」と関連して情報を提供することが望ましい。
5. 英語研修について文書作成が有効とみられるので別途作成中の「技術協力専門家のための英文ハンドブック」の活用が望まれる。

2. 中期研修

〔1〕 調査結果

(1) 調査対象

中期研修参加者はインドネシアの長期専門家184名中10名にすぎず，うち6名に面接した。上記10名の質問表に対する回答をもとに分析すれば以下のとおりである。なお語学研修については集合研修に譲った。

絶対数が少ないので実数を挙げることとし，比率は参考として読むことが適当であろう。

(2) 一般研修

イ. 「国際協力」に関する3科目のうち，①及び②について1人が「いゝえ」の回答をした。その理由として同人が中期研修に参加したのは昭和50年5月であり，当時同人は派遣されるか否か不明のため，身が入らず，そもそも一般研修については余り記憶にないとのことであった。なお，派遣されたのはそれから5年後であったとのことである。

ロ. 「開発途上国」に関する3科目について1名が3科目全部について講義内容が抽象的すぎるとし1名が①については古いデーターをもとにした講義内容は現状と違いすぎる。また他の1名は③についてイと同様の理由から否定的回答をしたとのことであった。

第21表　一般研修の調査結果

項　　目	講　　議　　名	回答数	「はい」	「いいえ」	「はい」率
国際協力	① 国際協力と開発援助について	10	9	1	90 %
	② JICAの組織と専門家の派遣について	10	9	1	90
	③ 有償・無償資金協力について	10	10	0	100
開発途上国の理解	① 途上国の現状と課題について	10	8	2	80
	② 開発理論と戦略について	10	9	1	90
	③ 地域概論について	10	8	2	80
技術移転の概念	① 技術指導方法について	10	8	2	80
	② 技術協力専門家論	10	7	3	70

第22表　現地研修の調査結果

区分	設　　問	回答数	インドネシア	タイ	「はい」	「いいえ」
海外	① 海外研修国はどこか	6	4	2		
	② 海外研修国と任地が同じか	6			4	2
	③ 海外研修での経験は生かされているか	6			6	
国内	① 国内研修での経験は生かされているか	3			2	1
	② 国内研修で修得した技術は任地で活用しているか	3			1	2

第23表　専門研修の調査結果

項　　目	回答数	社会開発	農林業	鉱工業	「はい」	「いいえ」	「良く使う」	「時々使う」	「使わない」
① 受講分野	10	8	1	1					
② 講義の中で役立っているもの	6	省略							
③ 技術訓練手法は活用	4				3	1			
④ 技術訓練手法は必要か	4				4	0			
⑤ 携行したOV機器	6				0	6			
⑥ 任地で活用しているOA機器	5						2	1	2
⑦ 作成した機材	4				2	2			

ハ. 「技術移転の概念」の2科目について1名が抽象的であったから，また1名が任国によって事情が異なるからとの理由で，また②については1名が（イ）と同様の理由で否定的回答をしたとのことであった。

ニ. 以上のほか一般研修についての意見は次のとおり，

(イ) これまで国際協力等についての背景がなかったので基礎的知識として役に立った。特にインドネシア赴任が決っていたので意欲・問題意識とも充分であった。

(ロ) 「有償・無償資金協力について」は内容に重複が多いし中期研修としては内容的に詳し過ぎる。

(3) 現地研修

イ。回答数10名のうち1名は記入しておらず，面接していないため，有効回答数は9名である。　（うち，6名が海外研修，3名が国内研修であった。）

ロ。海外研修の6名のうち4名がインドネシアで任地と一致しており，現地研修での経験が生かされているとのことであった。

残る2名はタイで，任地と異なるが，その経験は生かされているとのことであり，特に1名は任地と異なることが,寧ろ2ケ国に亘る経験が出来たこと，両国を比較できる点でも有意義であったとの積極的な説明があった。

また他の1名は現地研修期間があと2日あればもっと充実した研修が出来るとの意見を付している。

ハ．国内研修3名のうち2名は，昭和50年度及び54年度の参加者であり，研修内容は語学であったので語学はいかされているとの肯定的回答であったが，残る1名は国内研修の経験及び技術ともにいかされていないとの回答であり，理由として任地と事情が異なっており，そもそも国内研修の狙いが理解出来ないとのことであった。

(4) 専門研修

イ．回答者10名の内訳は社会開発8名（マンパワー5，インフラストラクチュア3）農業1名，鉱工業1名で社会開発（マンパワー）に集中しているので回答内容の評価には慎重を要する。

ロ、講義の中で現在役立っているものを列挙すると次のとおりである。

社会開発コースについては事例討議，ＴＰシート作成，フィージビリティスタディ手法日本の技術協力の体系，職業訓練技術，

農林水産コースについては，海外農業開発協力の推進，インドネシアとタイにおける技術協力から，工事と契約，海外における工事と契約，東南アジアにおける土木施工技術

ハ．技術協力訓練手法について

60年度以降参加者に限られているため有効回答数は4名にすぎないが，うち3名は業務の中で活用しており，かつ有意義であると述べており，活用例としてはカリキュラムの作成，講義，訓練の場としている。

残る1名は現在活用はしていないが，有用かつ有意義であるとしている。

上記のうち1名の所感としてＪＩＣＡの研修では視聴覚教育技法に重点があるが現場の中では「如何に内容そのものに興味を持たせるかに苦心している」との説明がなされている。

ニ．ＡＶ機器について回答した者は6名で全員が携行したＡＶ機器はないと答え，現実には機械供与で購送された，ＯＨＰ，ビデオ等を使っている者が3名いた。

また，教材を作成した者2名，作成しない者2名となっている。

ホ．以上のほか専門研修について次の意見があった。

(イ) ＯＨＰの活用の講義は参考になった。現在自分でフイルムＶＴＲを作成している。

(ロ) ＯＡ機器の保存に問題がある。

(ハ) 専門分野毎の専門家の先輩との交流が必要ではないか。

(ニ) 任国に関する話は集合研修と重複してもよい。

(ホ) 訓練技法は余り役に立たない。業務上は寧ろペーパー，黒板，実験等を中心に行っている。

(ヘ) コンピューター，イラスト作成等の研修が望ましい。

(ト) 講義は概念的にならないようにしてほしい。

(チ) 専門研修は重要であるが，講義間の重複を避け具体的な内容のあるものにして欲しい。

(5) 総　　合

中期研修全般についての感想・意見は次のとおり。

イ．有意義であり役に立つ。

ロ．再研修出来るようにして欲しい。

ハ．年２回でなく，随時開催し，随時聴講できるようにして欲しい。

ニ．総研は専門家のベース・キャンプであるから各種情報（テキスト・教材）も流して欲しい。

ホ．人間関係及び日本人間の協調性を高める内容のものを多く入れた方が良い。

ヘ．任国事情について担当分野の経験を持つ専門家との意見交換ができる時間を組み込んで欲しい。

ト．現地研修は全員が海外研修出来るようにすることが望ましい（２名）。

〔２〕 改善点

(1) 一般研修

イ．「国際協力」について

(イ) 専門家にとって必要な知識として修得せしめるため，大綱は現状のとおりとする。

(ロ) 「有償・無償資金協力」については詳細に過ぎないよう講義内容の検討が望ましい。

また両者について重複を避けるよう留意すること。

ロ．「開発途上国の理解」について

(イ) 「途上国の現状と課題について」はデータは可及的に最近のものとするよう努めること。

(ロ) 「地域概論について」は今後受講者に派遣内定者が多くなることを考慮すると世界各

地域を１つの講義とすることは適当ではないので，地域別講義とし，選択とすること。

ハ．「技術移転の概念」について

２つの講義はいずれも有用かつ必要であるが，抽象論になり勝であるので，より理解を深めるため，具体的な内容とするよう配慮することが望ましい。

(2) 現地研修

イ．国内研修は廃止し，海外研修に振替えること。

ロ．海外研修先がタイとインドネシアに限られるとすれば任国が両国に内定している場合は任国と研修先国を可及的に一致させること。

ハ．現地研修の円滑かつ効果的な実施についてはＪＩＣＡ事務所の協力が必要であり，現地でのＪＩＣＡ事務所との諸連絡，訪問，意見交換，研修結果報告等に遺憾のないよう留意すること，このため，海外研修の国別の総括者を指定すること。

ニ．可能ならば研修期間を１日延長すること。

(3) 専門研修

イ．講義間に重複のないよう留意すること。

ロ．講義内容が概念的，抽象的にならないようにすること。

ハ．専門分野別の専門家経験者との交流を考慮すること。

ニ．特に教育訓練技法に関しては，現状の改善に努めるとともに，講義方法についての手法の開発を検討すべきである。

(4) その他

テキスト等資料の作成について統一性，規格性を考慮し可及的にコンパットなものとするよう心掛ること。

3. リーダー／調整員コース

〔１〕 調査結果

(1) 調査対象

本研修コース参加者のうち，回答のあった者は６名で全員について面接した。（リーダー 3. 調整員３）。なお回答はなかったが別途１名について面接した。こゝでは回答について検討する。

(2) 研修一般

回答者の全員が①研修が全体として役に立った。②講義内容を十分に消化したとしており，

本研修の有用性が明らかである。

その他本研修に関連する問題・希望及び改善点について次の説明があった。

・出来れば専門家の経験者と初めての者を区別して欲しい。(経験者は参加しなくてもよい)

(3) 講義内容

イ. 理論課程に属する2つの講義のうち，①プロジェクト協力の概要については全員が役立っていると答え，うち1名はその理由としてテキストを時々利用しているとの事であった。②プロジェクトの運営管理と評価については1名が否定的回答をしているが，説明として講義が一般的であるが，自己のプロジェクトにあてはまり難いと考えたからとのことであった。

ロ. 実務課程に属する8つの講義のうち③無償資金協力との連携，⑥専門家諸制度と緊急事態対処法，⑦受入国側にかゝる諸問題と日本側の対応，について各1件の否定的回答があった。その理由として③については，同人のプロジェクトが無償資金協力に関係がなかったから，⑥については緊急事態に遭遇していないから，⑦については，国によって事情が異なるからとの理由であり，いずれも否定する理由としては薄弱である。⑧の回答がない1名は参加の時期が昭和49年であり講義がなかったと理解していることによるものである。

ハ. ケーススタディ課程の2つの講義は回答者の5名がいずれも業務上役に立ったとしているが，回答していない1名は，その理由としてロの⑧と同様昭和49年当初時にはこのような講義はなかったと理解していることによるものである。

ニ. 前記の講義内容に関する改善点及び希望として次のようなものがあった。

- 海外における人間関係について①問題の起り易い場合，②防止策，③事例，について講義をして欲しい
- ロの⑧に関し，もっと時間をかけて欲しかった。(例えば実際に書かせる等)

(4) 総　合

イ. 本研修コースと実際上のギャップに関しては次のとおり。

- 調整員には特に文書，経理，物品管理についてテキストを渡しておいて欲しい。
  (調整員はこれ等について充分な知識が必要)
- チームメンバーの中に語学能力の欠けた者がいるのが最も困る。
- 地方都市(ジョグジャカルタ)のため，機材の引取りに時間がかゝる。

ロ. 本研修に更に付け加えるべきものについては次のとおり。

- 心配事コーナーによる個別打合せ。
- 語学を含め性格等の適性を充分確かめる調査が必要。

ハ. その他本研修についての感想及び意見は次のとおり。

- 派遣時期と研修時期の調整

- テキスト等をコンパクトにまとめる。
- 語学研修の一部を割かずに時間を足して実施する。
- 調整員体験者の経験談は参考になった。（調整員にとって）
- 全体の時間をのばしてじっくり実務的にやって欲しい。

第24表　リーダー／調整員コースの回答状況

区分	課程	設　問・講　義	回答数	「はい」	「いいえ」	「はい」の率
研修一般		① 研修は全体として役に立っているか	6	6	0	100
		② 講義内容は十分消化しているか	6	6	0	100
講義内容	理論課程	① プロジェクト協力の概要	6	6	0	100
		② プロジェクトの運営管理と評価	6	5	1	83
	実務課程	① プロジェクト協力の仕組とリーダー調整員の役割	6	6	0	100
		② 関連予算と使い方	6	6	0	100
		③ 無償資金協力との連携	6	5	1	83
		④ 研修員受入と第三国研修	6	6	0	100
		⑤ 携行機材・機材供与にかかる問題	6	6	0	100
		⑥ 専門家諸制度と緊急事態対処法	6	5	1	83
		⑦ 受入国側にかかる諸問題と日本側の対応	6	5	1	83
		⑧ 英語による会議の進め方と公用文等の書き方	5	5	0	100
	ケース・スタディ課程	① 技術移転の事例研究	5	5	0	100
		② 専門家チームの事例研究	5	5	0	100

〔2〕 改善点

(1) 講義内容について

イ. 現行の講義内容は，有用かつ適切であるのでそのまゝとする

ロ. 今後更に追加を検討すべきものとして，リーダーについては人事管理・人間関係管理に関する講義（ケース・スタディ）を，また調整員については，上記に加え経理・物品管理等に関する講義またはマニュアルの提供等が考えられる。

(2) 研修コースの運営について

イ. 研修コース参加者には，初めて専門家になり，リーダー乃至調整員になった者，一般専門家からリーダー乃至調整員になった者，再度参加した者等種々であり，参加者の人選に一考を要する。

ロ. 前記（1），ロを実施するため，研修期間を6日間とし，土曜日の1コマを増加することを検討する。

(3) その他

リーダーと調整員の役割分担を更に明確にし，特にリーダーの権限強化を検討すべきであろう。

Ⅲ　専門家適性管理のあり方

専門家適性管理の一環としての専門家の語学能力のモニタリングはインドネシア及びシンガポールにおいても実施されているが，特に派遣専門家数の圧倒的に多いインドネシアにおいてはモニタリングの実施上次のような問題がＪＩＣＡ事務所から提起された。

1. モニタリングの対象者に前回ならないものが今回指定されて来た。即ちモニタリングの対象者によって早期に連絡があった者とそうでない者とがあり，その区別はどうなっているか疑問である。
2. モニタリング対象者であることの本人への通知は確実になされているか，事務所としてはモニタリング実施上疑問がある。
3. モニタリングの方法として本人へのインタービュー方式でよいかも疑問である。
4. モニタリングの方法として，本人のカウンターパートに評価を求めることもカウンターパートに語学能力がない場合は不適当である。
5. 上記3.4のことから，本人の語学能力の向上を把握すること，乃至改善状況の把握が困難である。
6. インドネシアのように対象者が多数の場合は能力的にも困難がある。

以上の点については国によって状況は異なるが，事務所の意見として検討の余地があるので至急検討のうえ，改善策を事務所に通知することが必要である。

ま と め

本件調査はインドネシア及びシンガポールの２ケ国に長期派遣された専門家及び専門家夫人69人を対象として，アンケート調査及び面接調査を行ったもので調査日程の都合上数に限度があり，調査結果の分析と評価を慎重に行った。

したがって改善点の指摘は調査結果をもとに調査チームの考察と判断を付加して行ったものである。

本件調査に協力をいただいた，専門家夫人，ＪＩＣＡ事務所並びにインドネシア，シンガポール側関係者に御礼を申し上げるものである。

資料 1

一般質問表（専門家夫人を除く）

No. 1

氏名		年令	才	専門分野		派遣時期	昭和　年　月
				所属先		滞在期間	年　ヵ月

1. 派遣前に海外での業務経験はありましたか。　有　無

「有」の場合以下にご記入下さい。

① ＪＩＣＡ専門家　昭和＿＿年＿＿月　から　＿＿年＿＿月　派遣国　＿＿＿＿

〃　＿＿年＿＿月　〃　＿＿年＿＿月　〃　＿＿＿＿

〃　＿＿年＿＿月　〃　＿＿年＿＿月　〃　＿＿＿＿

② 調査団　＿＿＿＿回

③ 協力隊員　＿＿＿＿回　＿＿＿年　派遣国　＿＿＿＿

④ その他（民間等）先進国　＿＿＿回　＿＿＿年　途上国　＿＿＿回　＿＿＿年

2. 専門家になった動機　（複数回答可）

① 技術協力への参加意識　② 海外勤務への興味　③ 組織・上司の勧め

④ 収入の増加　⑤ 海外生活を体験したい　⑥ 赴任国への興味

⑦その他、具体的にお書き下さい（　　）

3. 研修の受講歴（下の項から番号を選びその時期を新しいものから記入して下さい）

No.＿＿＿＿　昭和＿＿年＿＿月　から　＿＿年＿＿月

No.＿＿＿＿　〃　＿＿年＿＿月　〃　＿＿年＿＿月

No.＿＿＿＿　〃　＿＿年＿＿月　〃　＿＿年＿＿月

① 集合研修（a 業務＋語学　b 業務のみ　c 語学のみ）　② 個別語学研修

③ 個別技術研修　④ 中期研修　⑤ リーダー・調整員研修　⑥ 海外長期研修

⑦ 国内長期技術研修　⑧ 協力隊派遣前訓練　⑨ ＪＩＣＡの研修は受講せず

⑩ その他（民間等）（　　）

4. 研修全般について

① 受講された研修は、有意義だったと思いますか。

イ 大変有意義　ロ 有意義　ハ 普通　ニ 有意義でない　ホ やらないほうがよい

↓（ニ・ホ の場合）

有意義でないと思う理由はなんですか。又、その事例等があればお書き下さい。

② 上記以外に研修期間、内容の選択や配分、実施の方法等全般的なご意見やご提言があれば、ご記入下さい。

集合研修に関する質問表

No. 2

氏名		受講時期	昭和　　年　　月

一般研修

以下の講義について、業務や生活上役に立っていますか。（「いいえ」の場合理由をお書き下さい）

1. 『国際協力』
   - ① 我が国の経済協力について　はい　いいえ　（理由）
   - ② ＪＩＣＡの役割について　はい　いいえ　（理由）
   - ③ 専門家派遣のしくみについて　はい　いいえ　（理由）
   - ④ 専門家と関連事業について　はい　いいえ　（理由）
   - ⑤ 専門家の処遇諸制度について　はい　いいえ　（理由）
2. 『協力活動』
   - ① 専門家の活動指針について　はい　いいえ　（理由）
   - ② 活動事例について　はい　いいえ　（理由）
   - ③ ＪＩＣＡ派遣担当者との打ち合せについて　はい　いいえ　（理由）
3. 『開発途上国』
   - ① 異文化理解について　はい　いいえ　（理由）
   - ② 任国事情について　はい　いいえ　（理由）
   - ③ 健康管理について　はい　いいえ　（理由）
   - ④ 安全対策について　はい　いいえ　（理由）
   - ⑤ 海外子女教育について　はい　いいえ　（理由）

希望又は改善点など、あるいは関連する問題点等があればお書き下さい。
（特に任国事情について不足、または不正確だった点があればコメント願います。）

語学研修

1. 現在の状況について
   - ① 使用言語は何ですか。
     - ア業務上 ＿＿＿＿
     - イ日常生活 ＿＿＿＿
       - ａ英語のみ　ｂ英語に多少現地語
       - ｃ英語現地語半々　ｄ現地語が主
       - ｅ現地語のみ
   - ② （①でａまたはｂと回答した方）現地語の必要性はどの程度ですか。
     - ア業務上　大きい　小さい
     - イ日常生活　大きい　小さい
   - ③ （①でｃ，ｄまたはｅと回答した方）現地語はどのように修得しましたか。
     - ａＪＩＣＡ研修以前（大学，語学学校等）
     - ｂＪＩＣＡ研修
     - ｃ赴任後
2. 語学講義について
   - ①英語研修で特に役にたっているものは何ですか。（受講者のみ回答）
   - ② 英語研修でどのようなことをやってもらいたかったですか。（受講者のみ回答）
     - ａ会話表現　ｂ聞き取り　ｃ文書作成
     - ｄ読解　ｅ語彙　ｆ会議運営　ｇ交渉術
     - ｈその他（　　）
   - ③ 現在、研修で英語と現地語とどちらを学習しておけば良かったとお考えですか。
     - ａ英語　ｂ現地語　ｃ両方
   - ④ 赴任後語学の学習をしていましたか。
     - 英語　（していた　している　していない）
     - 現地語（していた　している　していない）
   - ⑤ 講義で使用した教材は現在でも利用していますか。（している　していない）

語学研修に対するご意見等をお書き下さい。（研修期間、講義手法等）

総合

1. 研修を受けて理解していた内容と、任地へ来て実際につき当った現実との間で生じたＧａｐがあれば上げて下さい。又、現在困っていること、問題等があれば列挙して下さい。

2. 研修に含まれておらず、今後付け加えたほうが良いと思われることがらを上げて下さい。

3. その他集合研修全般について、ご意見・ご感想、あるいはご提案をお書き下さい。

集合研修に関わる質問表（夫人用）

No．3

氏　名		年齢	才	派　遣　期　間	昭和　　年　　月
				滞　在　期　間	年　　ヵ月

一般質問

1．派遣前に海外経験はありましたか。　有　無

⬇ 有りの場合

滞在国 ＿＿＿＿＿＿　時期 ＿＿年 ＿＿月 から ＿＿年 ＿＿月

〃 ＿＿＿＿＿＿　〃 ＿＿年 ＿＿月 〃 ＿＿年 ＿＿月

〃 ＿＿＿＿＿＿　〃 ＿＿年 ＿＿月 〃 ＿＿年 ＿＿月

2．過去の海外経験の中で何かコメントがありましたらお書き下さい。

講義内容

以下の講義について生活上役に立っていますか。（「いいえ」の場合理由をお書き下さい。）

1．『国際協力』

①我が国の経済協力について　はい　いいえ　（理由）

2．『夫人研修』

①　帰国専門家婦人との懇談会について　はい　いいえ　（理由）

②　料理と健康管理について　はい　いいえ　（理由）

③　専門家夫人の役割について　はい　いいえ　（理由）

3．『開発途上国』

①　異文化理解について　はい　いいえ　（理由）

②　任国事情について　はい　いいえ　（理由）

③　健康管理について　はい　いいえ　（理由）

④　安全対策について　はい　いいえ　（理由）

⑤　海外子女教育について　はい　いいえ　（理由）

希望又は改善点など、あるいは関連する問題点等があればコメント願います。
（特に任国事情について不足、又は不正確だった点が有ればコメント願います。）

語学研修

1．現在の状況について

①　日常生活での使用言語は何ですか。

a英語のみ　b英語に多少現地語
c英語現地語半々　d現地語が主
e現地語のみ

②　（①でaまたはbと回答した方）
現地語の必要性はどの程度ですか。
大きい　小さい

③　（①でc，dまたはeと回答した方）
現地語はどのように修得しましたか。
aＪＩＣＡ研修以前（大学，語学学校等）
bＪＩＣＡ研修
c赴任後

2．語学講義について

①英語研修で特に役にたっているものは何ですか。（受講者のみ回答）

②　英語研修でどのようなことをやってもらいたかったですか。（受講者のみ回答）
a会話表現　b聞き取り　c文書作成
d読解　e語彙　f会議運営　g交渉術
hその他（　　）

③　現在、研修で英語と現地語とどちらを学習しておけば良かったとお考えですか。
a英語　b現地語　c両方

④　赴任後語学の学習をしていましたか。
英語　（していた　している　していない）
現地語（していた　している　していない）

⑤　講義で使用した教材は現在でも利用していますか。（している　していない）

語学研修に対するご意見等があればお書き下さい。（研修期間、講義手法等）

総合

1．研修を受講して理解していた内容と、任地へ来て実際につき当った現実との間で生じたＧａｐがあれば上げて下さい。又、現在困っていること、問題等があれば列挙して下さい。

2．集合研修全般についてご意見・ご感想、あるいはご提案があればお書き下さい。

中期研修に関する質問表

No. 4

氏名		受講時期	昭和　　年　　月

一般研修

以下の講義について、業務上役にたっていますか。（「いいえ」の場合理由をお書き下さい。）

1. 『国際協力』
   - ① 国際協力と開発援助について　はい　いいえ　（理由）
   - ② ＪＩＣＡの組織と専門家の派遣について　はい　いいえ　（理由）
   - ③ 有償・無償資金協力について　はい　いいえ　（理由）
2. 『開発途上国の理解』
   - ① 途上国の現状と課題について　はい　いいえ　（理由）
   - ② 開発理論と戦略について　はい　いいえ　（理由）
   - ③ 地域概論について　はい　いいえ　（理由）
3. 『技術移転の概念』
   - ① 技術指導方法について　はい　いいえ　（理由）
   - ② 技術協力専門家論　はい　いいえ　（理由）

希望又は改善点など、あるいは関連する問題点等があればお書き下さい。

語学研修

（集合研修の所で回答された方は記入不用です。）

1. 現在の状況について
   - ① 使用言語は何ですか。
     - ア業務上 ＿＿＿
     - イ日常生活 ＿＿＿
     - a英語のみ　b英語に多少現地語
     - c英語現地語半々　d現地語が主
     - e現地語のみ
   - ② （①でａまたはｂと回答した方）現地語の必要性はどの程度ですか。
     - ア業務上　大きい　小さい
     - イ日常生活　大きい　小さい
   - ③ （①でｃ，dまたはｅと回答した方）現地語はどのように修得しましたか。
     - ａＪＩＣＡ研修以前（大学，語学学校等）
     - ｂＪＩＣＡ研修
     - ｃ赴任後

2. 語学講義について
   - ①英語研修で特に役にたっているものは何ですか。（受講者のみ回答）
   - ② 英語研修でどのようなことをやってもらいたかったですか。（受講者のみ回答）
     - ａ会話表現　ｂ聞き取り　ｃ文書作成
     - ｄ読解　ｅ語彙　ｆ会議運営　ｇ交渉術
     - ｈその他（　　）
   - ③ 現在、研修で英語と現地語とどちらを学習しておけば良かったとお考えですか。
     - ａ英語　ｂ現地語　ｃ両方
   - ④ 赴任後語学の学習をしていましたか。
     - 英語　（していた　している　していない）
     - 現地語（していた　している　していない）
   - ⑤ 講義で使用した教材は現在でも利用していますか。（している　していない）

語学研修に対するご意見等をお書き下さい。（研修期間、講義手法等）

No. 5

氏名		受講時期	昭和　　年　　月

現地研修

【海外研修受講者用】

① 海外研修国はどこですか。＿＿＿＿

② 海外研修国と任地が同じですか。
はい　いいえ

③ 海外研修での経験はいかされていますか。
↓　はい　いいえ
いいえの場合どのような点ですか。
（　　）

海外研修に関連したご意見等お書き下さい。

【国内研修受講者用】

① 国内研修での経験はいかされていますか。
↓　はい　いいえ
いいえの場合どのような点ですか。
（　　）

② 研修で修得した技術は任地で活用していますか。
↓　はい　いいえ
はいの場合（ スライド　ビデオ　OHP　その他）

国内研修に関連したご意見等お書き下さい。

専門研修

1. 講義内容について
①受講された分野名
＿＿＿＿＿＿
サブコース名
＿＿＿＿＿＿
②講義の中で現在役立っているものをあげて下さい。
イ
ロ
ハ

2. 技術協力訓練手法について
（昭和60年度以降の受講者）
① 訓練手法は任地での仕事の中で活用されていますか。
はい　いいえ
↓（はいの場合）
活用例をお書き下さい。
（例）授業のなかで＿＿＿＿＿＿
② 訓練手法は任地での業務に必要だと思われますか。
↓　はい　いいえ
その理由は何ですか。

3. Audio Visual について
① 携行したＡＶ機器はありますか。
はい　いいえ
↓（はいの場合）
携行したＡＶ機器名を書いて下さい。
＿＿＿＿＿＿
② 任地でどのようなＡＶ機器を使用していますか。
＿＿＿＿＿＿
イ 良く使う
ロ 時々使う
ハ 使わない
③ 教材を作成しましたか。
はい（ 種類　　）いいえ

専門研修に関連するご意見・提案事項をお書き下さい。

総合

1. 研修を受けて理解していた内容と、任地へ来て実際につき当った現実との間で生じたＧａｐがあれば上げて下さい。又、現在、困っていること、問題等があれば列挙して下さい。

2. 研修に含まれておらず、今後付け加えたほうが良いと思われることがらを上げて下さい。

3. 中期研修全般について、ご意見・ご感想、あるいはご提案をお書き下さい。

プロジェクト・リーダー／調整員コース

No. 6

氏名		受講時期	昭和　　年　　月

研修一般

1. 研修は全体として役に立っていますか。
　はい　　いいえ
　↓
「いいえ」の場合理由をお書き下さい。

2. 講義内容を十分に消化できましたか。
　はい　　いいえ
　↓
「いいえ」の場合理由をお書き下さい。

その他、関連する問題、希望、改善点などがあればお書き下さい。

講義内容

以下の講義について、業務上役立っておりますか。

1. 『理論課程』
　① プロジェクト協力の概要について　はい　いいえ　（理由）
　② プロジェクトの運営管理と評価について　はい　いいえ　（理由）
2. 『実務課程』
　① プロジェクト協力の仕組とリーダー、調整員の役割　はい　いいえ　（理由）
　② 関連予算と使い方　はい　いいえ　（理由）
　③ 無償資金協力との連携　はい　いいえ　（理由）
　④ 研修員受入と第三国研修　はい　いいえ　（理由）
　⑤ 携行機材、供与機材に係る問題　はい　いいえ　（理由）
　⑥ 専門家諸制度と緊急事態対処法　はい　いいえ　（理由）
　⑦ 受入国側に係る諸問題と日本側対応　はい　いいえ　（理由）
　⑧ 英語による会議の進め方と公用文等の書き方　はい　いいえ　（理由）
3. 『ケーススタディ課程』　はい　いいえ　（理由）
　① 技術移転の事例研究　はい　いいえ　（理由）
　② 専門家チームの事例研究　はい　いいえ　（理由）

希望又は改善点など、あるいは関連する問題点等があればお書き下さい。

総合

1. プロジェクトリーダー／調整員コースを受けて理解していた内容と、任地へ来て実際につき当った現実との間で生じたＧａｐがあれば上げて下さい。現在困っていること、問題点を列挙して下さい。

2. 研修に含まれておらず、今後付け加えたほうが良いと思われることがらを上げて下さい。

3. プロジェクトリーダー／調整員コース全般について、ご意見・ご感想、あるいはご提案をお書き下さい。

資料２－１

専門家派遣前集合研修

□の部分は専門家，夫人とも共通講義

（専門家研修）

		曜日	午　前(9:30～12:30)			午　後(13:30～16:30)	
			講義名			講義名	
一般研修	1	月	開講式 9:30～9:50	コースガイダンス 10:00～11:30	性格検査 11:30～12:10	我が国の経済技術協力政策 13:30～14:30	海外渡航準備 14:40～16:30
	2	火	JICAの役割・専門家派遣の仕組と関連事業			専門家の待遇及び諸制度	
	3	水	専門家の活動指針			専門家の活動事例	
	4	木	JICA派遣担当部との実務についての打合せ（於：事業団本部）				
	5	金	異文化理解			安全対策 13:30～14:30	海外子女教育 14:40～16:30
	6	土	語学研修ガイダンス				
	7	日					
	8	月	健康管理Ⅰ（精神衛生）			健康管理Ⅱ（内科・風土病）	
	9	火	任国事情Ⅰ／Ⅱ			任国事情Ⅰ／Ⅱ	
	10	水	任国事情Ⅰ／Ⅱ			任国事情Ⅰ／Ⅱ	

（専門家夫人研修）

		曜日	午　前(9:30～12:30)			午　後(13:30～16:30)	
			講義名			講義名	
一般研修	1	月	開講式 9:30～9:50	コースガイダンス 10:00～11:30	性格検査 11:30～12:10	我が国の経済技術協力政策 13:30～14:30	海外渡航準備 14:40～16:30
	2	火	語学オリエンテーション			語学オリエンテーション	
	3	水	専門家夫人の役割と任国での交際			帰国専門家夫人との座談会（13:30～15:30）	
	4	木	料理と健康管理				
	5	金	異文化理解			安全対策 13:30～14:30	海外子女教育 14:40～16:30
	6	土	語学研修ガイダンス（語学研修聴講者のみ）				
	7	日					
	8	月	健康管理Ⅰ（精神衛生）			健康管理Ⅱ（内科・風土病）	
	9	火	任国事情Ⅰ／Ⅱ			任国事情Ⅰ／Ⅱ	
	10	水	任国事情Ⅰ／Ⅱ			任国事情Ⅰ／Ⅱ	

			午　前	午　後	
語学研修（夫人聴講可）	11	木	語　学	語　学	
	12	金	〃	〃	
	13	土	〃		
	14	日			
	15	月	語　学	語　学	
	16	火	〃	〃	
	17	水	〃	〃	
	18	木	〃	〃	
	19	金	〃		
	20	土	〃		
	21	日			
	22	月	語　学	語　学	
	23	火	〃	〃	
	24	水	〃	〃	
	25	木	〃	〃	
	26	金	〃		
	27	土	〃		
	28	日			
	29	月	語　学	語　学	
	30	火	〃	13：30～15：30　語 学	15：45～16：45　閉講式

※講師の都合等により若干プログラムに変更がありますので予めご了承下さい。

※語学研修ガイダンスは、英語研修受講者についてはクラス分けのためのテストも行います。
その他英語圏へ赴任される専門家は、語学研修を受講されない場合でも全員受講して頂きます。

資料２－２

派遣前専門員等中期研修

一般研修日程

	月／日	曜日	時間	講義名	講師名	現職
第一週	5/12	月	10:00～12:30	開講式 オリエンテーション		
	5/12	月	13:30～16:30	英語クラス分けテスト 西語ガイダンス		
	5/13	火	9:30～10:50 11:00～12:30	「南北問題と国際協力の意義」 「開発途上国の現状と課題」	長谷川正男 等々力　勝	JICA国際協力総合研修所長 〃　人材養成課
	5/13	火	13:30～16:30	先進諸国の開発援助	藤村　建夫	JICA国際協力総合研修所 人材養成課長
	5/14	水	9:30～12:30	開発理論と開発戦略(I)	鳥居　泰彦	慶應義塾大学経済学部教授
	5/14	水	13:30～16:30	〃　(II)	〃	〃
	5/15	木	9:30～12:30	国家開発計画論	広野　良吉	成蹊大学経済学部教授
	5/15	木	13:30～16:30	JICAの組織と専門家派遣	藤田　廣巳	JICA国際協力総合研修所 人材養成課長代理
	5/16	金	9:30～12:30	技術協力専門家論	藤村　建夫	JICA国際協力総合研修所 人材養成課長
	5/16	金	13:30～15:00 15:10～16:30	無償資金協力 有償資金協力	岩口　建二	JICA無償資金協力計画課長
第五週	6/ 9	月	13:30～16:30	地域概論：アジア地域	村田　晃	JICA総務部情報管理課長代理
	6/10	火	13:30～16:30	〃　：中東地域	中川　和夫	〃　研修事業部 研修第二課長代理
	6/11	水	13:30～16:30	〃　：中南米地域	G.アンドラーデ	上智大学 イベロアメリカ研究所長
	6/12	木	13:30～16:30	〃　：アフリカ地域	富田　浩造	JICA企画部
	6/13	金	13:30～16:30	技術指導の方法	中野　照海	国際基督教大学教授
第十一週	7/22	火	9:30～12:30	レポート作成		
	7/23	水	9:30～12:30	特別講演	未　定	
	7/24	木	9:30～12:30	パネルディスカッション 「日本の技術協力を考える」		
	7/25	金	9:30～12:30	総括、討論	各 コースリーダー	
	7/25	金	14:00～15:00 15:15～	閉講式 懇親会		

注：講師の都合等により日程が一部変更されることもあります。

社会開発(インフラストラクチャー)コース日程

	月/日	曜日	時間	講義名	講師名	現職
第六週	6/16	月	13:30〜16:30	技術協力における教育訓練のあり方	泉 輝孝	雇用促進事業団職業訓練研究センター 基礎研究部長
	17	火	13:30〜16:30	教育訓練プロジェクトのカリキュラム作成	牧野 馨	JICA 国際協力専門員
	18	水	13:30〜16:30	技術協力における教材作成 (I)	佐藤 昭宏	雇用促進事業団 中央技能開発センター 教導
	19	木	13:30〜16:30	〃 (II)	藤沢 翼也	国立職業リハビリテーションセンター訓練第一課長
	20	金	13:30〜16:30	〃 (III)	秋庭 守正	(財)海外職業訓練協会 教材開発課
第七週	23	月	13:30〜16:30	技術協力訓練手法(I)(諸分析)	仲田 博昭	(株)スリーエムビジネスシステムズ 第一営業部長代理
	24	火	13:30〜16:30	〃 (II)(訓練目標)	〃	〃
	25	水	13:30〜16:30	〃 (III)(レクチャリング)	〃	〃
	26	木	13:30〜16:30	〃 (IV)(コーチング)	〃	〃
	27	金	13:30〜16:30	現地研修説明	コース・リーダー	JICA 国際協力専門員
第八週	30	月	14:00〜16:00	技術移転のあり方(海外研修生との座談会)		(於:JICA 八王子国際研修センター)
	7/1	火	13:30〜16:30	教育訓練プロジェクトの運営と評価手法	五十嵐晃一	労働省職業能力開発局 海外協力課長補佐
	2	水	13:30〜16:30	技術協力プロジェクトの計画・運営・評価	矢追 秀敏	JICA 社会開発協力部 海外センター課長
	3	木	13:30〜16:30	パネル・ディスカッション(技術移転)	五十嵐晃一 世取山 清 小林 亮三	労働省職業能力開発局 海外協力課長補佐 〃 海外協力課 (財)海外職業訓練協会訓練第2課
	4	金	13:30〜16:30	現地研修オリエンテーション		
第十週	14	月	9:30〜12:30	現地研修レビュー	(コースリーダー)	
	15	火	9:30〜12:30	職業教育の国際比較	豊田 俊雄	東京国際大学教授
	16	水	9:30〜12:30	事例研究(I)		
	17	木	9:30〜12:30	〃 (II)		
	18	金	9:30〜12:30	〃 (III) 演習	境 純哉	(株)コスモインターナショナル 教育訓練本部長
第十一週	21	月	9:30〜12:30	受講者討論会(教育訓練専門家のあり方)	司会 コース・リーダー	

マンパワー・インフラ共通

注:講師の都合により日程が一部変更されることもあります。

社会開発(マンパワー)コース日程

	月／日	曜日	時間	講義名	講師名	現職	
第六週	6/16	月	13:30～16:30	技術協力訓練手法			
	17	火	13:30～16:30	〃			
	18	水	13:30～16:30	〃			
	19	木	13:30～16:30	〃			
	20	金	13:30～16:30	現地研修 対象プロジェクト説明			
第七週	23	月	13:30～16:30	地域開発計画(I)	藪田仁一郎	国際開発センター主任研究員	
	24	火	13:30～16:30	〃 (II)	野町　隆三	JICA国際協力専門員	
	25	水	13:30～16:30	開発途上国の社会開発の現状（都市開発計画）	〃	〃	
	26	木	13:30～16:30	〃 （運輸・交通計画）	岩田　鎮夫	㈱アルメック代表取締役	
	27	金	13:30～16:30	〃 （電気通信計画）	牧野　康夫	日本通信協力㈱会長	
第八週	30	月	13:30～16:30	開発調査の実務	新保　昭治	JICA社会開発協力部 開発調査第一課長	
	7/ 1	火	13:30～16:30	パネル・ディスカッション （個別専門家の技術移転）	小池　博 松岡　住夫 田中　弘道	横浜市港湾局みなとみらい21計画担当副主幹 NHK制作技術局映像技術部 住宅都市整備公団関東支社川口再開発事務所長	
	2	水	13:30～16:30	技術協力プロジェクトの計画・運営・評価	矢追　秀敏	JICA社会開発協力部 海外センター課長	マンパワー インフラ 共通
	3	木	13:30～16:30	開発プロジェクトの発想形成	一宮　隆夫	日本工営㈱理事	
	4	金	13:30～16:30	現地研修・オリエンテーション			
第十週	14	月	9:30～12:30	現地研修レビュー	(コースリーダー)		
	15	火	9:30～12:30	開発プロジェクトの計画と評価（I）	鳥山　正光	国際開発センター主任研究員	
	16	水	9:30～12:30	〃 (II)	〃	〃	
	17	木	9:30～12:30	〃 (III)	〃	〃	
	18	金	9:30～12:30	〃 (IV)	〃	〃	
第十一週	21	月	9:30～12:30	開発調査の実例	三好　皓一	JICA社会開発協力部 開発調査第一課長代理	

注：講師の都合等により日程が一部変更されることもあります。

環境衛生コース日程

	月／日	曜日	時間	講義名	講師名	現職
第六週	6／16	月	13:30～16:30	開発途上地域の環境衛生の現状と特徴	真柄　泰基	国立公衆衛生院衛生工学部長
	17	火	13:30～16:30	途上国における環境に由来する疾病とその予防	渋谷　敏朗	帝京大学医学部教授
	18	水	13:30～16:30	映画－安全な飲み水を求めて－ディスカッション	司会 桜井　国俊	JICA 国際協力専門員
	19	木	13:30～16:30	現地研修 対象プロジェクトの説明	未　定	
	20	金	13:30～16:30	開発途上国における大気汚染（中国の場合）	菱田　一雄	菱田環境計画事務所長
第七週	23	月	13:30～16:30	技術協力訓練手法		
	24	火	13:30～16:30	〃		
	25	水	13:30～16:30	〃		
	26	木	13:30～16:30	〃		
	27	金	13:30～16:30	開発途上国における下水道・し尿処理	柏谷　衛	東京理科大学理工学部土木工学科教授
	30	月	13:30～16:30	開発途上国における下水道事例研究（タイ）	松下　潤	住宅・都市整備公団都市開発事業部土木施設課副参事
第八週	7／1	火	13:30～16:30	パネルディスカッション・環境衛生分野における適正技術	綾　日出教 桜井　国俊	武蔵工業大学土木工学科教授 JICA国際協力専門員
	2	水	13:30～16:30	開発途上国における上水道（建設・管理）	横田　一郎	東京都水道局多摩建設事務所工事第一課長
	3	木	13:30～16:30	開発途上国における上水道（水質・水処理）	小島　貞夫	㈱日水コン中央研究所長
	4	金	13:30～16:30	現地研修 オリエンテーション		
第十週	14	月	9:30～12:30	現地研修 レビュー	(コースリーダー)	
	15	火	9:30～12:30	上水道施設コース研修員とのディスカッション	司会 桜井　国俊	JICA 国際協力専門員
	16	水	9:30～12:30	開発途上国における廃棄物処理	桜井　国俊	〃
	17	木	9:30～12:30	廃棄物分野技術協力事例（インドネシアの場合）	八木　美雄	厚生省水道環境部課長補佐
	18	金	9:30～12:30	開発途上国における水質汚染管理（タイの場合）	大垣真一郎	東京大学都市工学科助教授
第十一週	21	月	9:30～12:30	開発途上国における上水道協力事例 （タイ・チェンマイ大学）	矢野　洋	神戸市水道局水質試験所主査

注：講師の都合等により日程が一部変更されることもあります。

農林水産開発(農業一般)コース日程

	月／日	曜日	時間	講義名	講師名	現職	
第六週	6／16	月	13:30～16:30	農業技術協力プロジェクトの計画・運営・評価	田内　堯	JICA農業開発協力部長	共通 一般・土木
	17	火	13:30～16:30	技術協力訓練手法			
	18	水	13:30～16:30	〃			
	19	木	13:30～16:30	〃			
	20	金	13:30～16:30	〃			
第七週	23	月	13:30～16:30	現地研修対象プロジェクト説明			
	24	火	13:30～16:30	乾燥地農業	佐藤　一郎	前鳥取大学砂丘利用研究施設教授	
	25	水	13:30～15:00 15:00～16:30	熱帯の畜産開発 中米の水産開発と国際協力	緒方　宗雄 斉藤　陸志	JICA国際協力専門員 JICA国際協力専門員	
	26	木	13:30～16:30	開発途上地域の農業普及	中田　正一	元プロジェクトリーダー	
	27	金	13:30～16:30	熱帯におけるポストハーベスト技術	荒井　克祐	農水省熱帯農業研究センター企画連絡室研修科長	
第八週	30	月	13:30～16:30	熱帯の土壌	三宅　正紀	農水省熱帯農業研究センター調査情報部長	一般・土木共通
	7／1	火	13:30～16:30	F／Sの概念	中原　通夫	(財)日本農業土木総合研究所技術顧問	
	2	水	13:30～16:30	熱帯の畑作	岩田　文男	農水省熱帯農業研究センター研究第2部長	
	3	木	13:30～16:30	農林業専門家業務の進め方	緒方　宗雄	JICA国際協力専門員	林業共通 一般・土木・
	4	金	13:30～16:30	現地研修オリエンテーション			
第十週	14	月	9:30～12:30	現地研修レビュー	(コースリーダー)		
	15	火	9:30～12:30	農業開発調査の実務	太田　信介	農水省経済局国際協力課海外技術協力官	一般・土木共通
	16	水	9:30～12:30	熱帯の稲作	長田　明夫	宇都宮大学農学部教授	
	17	木	9:30～12:30	熱帯農業情報とその利用	長谷川聖人	農水省熱帯農業研究センター調査情報部研究調査情報官	
	18	金	9:30～12:30	事例研究	増淵　清	JICA特別嘱託	
第十一週	21	月	9:30～11:00 11:00～12:30	国際農業開発・研究機関 農林業国際協力の将来展望	川又　章 菊池　雅夫	JICA企画部専門調査役 農水省経済局海外技術協力室長	林業共通 一般・土木・

注：講師の都合等により日程が一部変更されることもあります。

農林水産開発(農業土木)コース日程

	月／日	曜日	時間	講義名	講師名	現職	
第六週	6／16	月	13:30～16:30	農業技術協力プロジェクトの計画・運営・評価	田内　堯	JICA農業開発協力部長	一般・土木共通
	17	火	13:30～16:30	開発途上地域における技術の選択	金森　秀行	JICA国際協力専門員	
	18	水	13:30～16:30	開発途上地域における土木施工と契約	山内　悦司	日本工営㈱ 農業事業部副理事	
	19	木	13:30～16:30	開発プロジェクト基盤整備事業の実施と運用	茨木　教晶	JICA農業開発協力部 農業開発課長代理	
	20	金	13:30～16:30	開発途上地域における土地分類手法と土地利用	北村貞太郎	京都大学農学部教授	
第七週	23	月	13:30～16:30	現地研修対象プロジェクト説明			
	24	火	13:30～16:30	技術協力訓練手法			
	25	水	13:30～16:30	〃			
	26	木	13:30～16:30	〃			
	27	金	13:30～16:30	〃			
第八週	30	月	13:30～16:30	熱帯の土壌	三宅　正紀	農水省熱帯農業研究センター 調査情報部長	一般・土木共通
	7／1	火	13:30～16:30	F／Sの概念	中原　通夫	㈶日本農業土木総合研究所 技術顧問	
	2	水	13:30～16:30	熱帯の畑作	岩田　文男	農水省熱帯農業研究センター 研究第2部長	
	3	木	13:30～16:30	農林業専門家業務の進め方	緒方　宗雄	JICA国際協力専門員	林業共通 一般・土木
	4	金	13:30～16:30	現地研修 オリエンテーション			
第十週	14	月	9:30～12:30	現地研修レビュー	(コースリーダー)		
	15	火	9:30～12:30	農業開発調査の実務	太田　信介	農水省経済局国際協力課 海外技術協力官	一般・土木共通
	16	水	9:30～12:30	熱帯の稲作	長田　明夫	宇都宮大学農学部教授	
	17	木	9:30～12:30	熱帯農業情報とその利用	長谷川聖人	農水省熱帯農業研究センター 調査情報部研究調査情報官	
	18	金	9:30～12:30	事例研究			
第十一週	21	月	9:30～11:00 11:00～12:30	国際農業開発・研究機関 農林業国際協力の将来展望	川又　華 菊池　雅夫	JICA企画部専門調査役 農水省経済局 海外技術協力室長	林業共通 一般・土木・

注：講師の都合等により日程が一部変更されることもあります。

農林水産開発(林業)コース日程

	月/日	曜日	時間	講義名	講師名	現職	
第六週	6/16	月	13:30～16:30	林業技術協力プロジェクトの計画・運営・評価	鈴木　進	JICA林業水産開発協力部長	
	17	火	13:30～16:30	技術協力訓練手法			
	18	水	13:30～16:30	〃			
	19	木	13:30～16:30	〃			
	20	金	13:30～16:30	〃			
第七週	23	月	13:30～16:30	現地研修 対象プロジェクト説明			
	24	火	13:30～16:30	熱帯林の開発計画と航空写真	渡辺　宏	日本林業技術協会開発部長	
	25	水	13:30～16:30	熱帯林の土壌特性	有光　一登	農水省林業試験場 土壌第3研究室長	
	26	木	13:30～16:30	熱帯林の病害	小林　享夫	農水省林業試験場 樹病研究室長	
	27	金	13:30～16:30	熱帯林の虫害	野淵　輝	農水省林業試験場 昆虫第2研究室長	
第八週	30	月	13:30～16:30	熱帯材の特徴と利用	須藤　彰司	農水省林業試験場材料科長	
	7/ 1	火	13:30～16:30	熱帯におけるアグロフォレストリー	熊崎　実	農水省林業試験場 経営第1科長	
	2	水	13:30～16:30	熱帯林の造成	坂口　勝美	日本林業技術協会顧問	一般・土木・林業 共通
	3	木	13:30～16:30	農林業専門家業務の進め方	緒方　宗雄	JICA国際協力専門員	
	4	金	13:30～16:30	現地研修 オリエンテーション			
第十週	14	月	9:30～12:30	現地研修レビュー	(コースリーダー)		
	15	火	9:30～12:30	砂漠化防止と造林	名村　二郎	海外林業コンサルタンツ協会 専務理事	
	16	水	9:30～12:30	熱帯林業に関する研究協力	内村　悦三	農水省林業試験場 海外林業調査科長	
	17	木	9:30～12:30	世界の林業資源と開発戦略	神足　勝浩	JICA参与	
	18	金	9:30～12:30	事例研究			
第十一週	21	月	9:30～11:00 11:00～12:30	国際農業開発・研究機関 農林業国際協力の将来展望	川又　章 菊池　雅夫	JICA企画部専門調査役 農水省経済局 海外技術協力室長	一般・土木・林業 共通

注：講師の都合等により日程が変更になることもあります。

鉱工業開発(資源エネルギー)コース日程

	月/日	曜日	時間	講義名	講師名	現職
第六週	6/16	月	13:30～16:30	開発プロジェクトの計画と評価 (1)	平木 俊一	日本興業銀行業務開発部課長
	17	火	13:30～16:30	〃 (2)	同	
	18	水	13:30～16:30	〃 (3)	同	
	19	木	13:30～16:30	〃 (4)	同	
	20	金	13:30～16:30	〃 (5)	同	
第七週	23	月	13:30～15:00 15:00～16:30	鉱工業分野における国際協力の現状と問題点	北村 俊男 三浦 計治	JICA鉱工業開発協力部長 JICA鉱工業計画調査部長
第七週	24	火	13:30～16:30	技術移転と適正技術	金森 秀行 秋山 伸一 戸田 敦義	JICA国際協力専門員
第七週	25	水	13:30～16:30	わが国および途上国の資源エネルギー政策と問題点	深海 博明	慶応大学経済学部教授
第七週	26	木	13:30～16:30	途上国の資源エネルギー開発の現状とその特徴	鴨崎 吉彦	工業技術院地質調査所海洋部長
第七週	27	金	13:30～16:30	技術協力訓練手法		
第八週	30	月	13:30～16:30	〃		
第八週	7/ 1	火	13:30～16:30	〃		
第八週	2	水	13:30～16:30	〃		
第八週	3	木	13:30～16:30	インドネシアにおける資源エネルギー開発と技術協力プロジェクト	村田 隆一 秋山 伸一	JICA鉱工業開発技術課 JICA国際協力専門員
第八週	4	金	13:30～16:30	現地研修 オリエンテーション		
第十週	14	月	9:30～12:30	現地研修レビュー	(コースリーダー)	
第十週	15	火	9:30～12:30	資源開発基礎調査の実際(ケース・スタディ)	石田 真	金属鉱業事業団海外部計画課長
第十週	16	水	9:30～12:30	途上国における鉱山開発の実態	吉川 恵章	三井金属鉱業㈱名誉顧問
第十週	17	木	9:30～12:30	途上国における石炭開発の実態	青木 正行	兼松江商㈱燃料資源部技術顧問
第十週	18	金	9:30～12:30	途上国における電力開発の実態	田子 信雄	電源開発㈱海外技術協力部調査役
第十一週	21	月	9:30～12:30	途上国における資源エネルギー開発の展望と技術協力	秋山 伸一	JICA国際協力専門員

注：講師の都合等により日程が変更になることもあります。

資料２－３

昭和61年度技術協力総合研修日程表

（第３回プロジェクト・リーダー／調整員コース）

月　日	時　　間	講　義　題　目	講　師　名
1／6 (火)	9:30～ 9:50 10:00～10:20 10:30～12:30 1:30～ 4:30 4:40～ 5:30	オリエンテーション 開　講　式 ・プロジェクト協力の仕組みとリーダー、調整員の役割 ・プロジェクトの運営管理と評価 ・関係予算と使い方 ・プロジェクト方式技術協力報告書作成の指針	人材養成課 挨拶　国際協力総合研修所　所長　長谷川　正男 国際協力総合研修所調査研究課長　後藤　洋 海外センター課長　矢追　秀敏 国際協力総合研修所調査研究課長代理　高間　英俊
1／7 (水)	9:30～12:30 1:30～ 3:00 3:10～ 4:30	・プロジェクト協力における技術移転の事例研究 ・無償資金協力との連携 ・研修員受入と第三国研修	元インドネシアボゴール農科大学リーダー　松山　晃 基本設計第二課長　谷川　和男 研修事業部管理課長代理　松岡　和久
1／8 (木)	9:30～10:30 10:40～12:30 1:30～ 3:00 3:10～ 4:30	・受入国側に係る諸問題 ・ローカルコスト負担に係る日本側対応と予算措置 ・携行機材、供与機材に係る問題 ・専門家諸制度と緊急事態対処法	総務部システム管理課長　後藤　亮之助 医療協力部管理課長　村越　俊雄 農業技術協力課長代理　川上　徹 開発調査第二課長代理　松谷　広志 技術者管理課長　南本　禎亮
1／9 (金)	9:30～12:30 1:30～ 4:30	・リーダー活動の事例 ・調整員活動の事例	元ブラジル鉱山公害防止チーフアドバイザー　臼井　美夫 元エジプトＣＴＡ電車訓練センターリーダー　佐野　武秀 青年海外協力隊　事務局派遣第一課　田臥　彰三 開発調査第二課長代理　中野　武 鉱工業計画課　濱崎　文彦
1／10 (土)	9:30～12:00 12:00～12:10	・英語による会議の進め方と公用文等の書き方 ・閉講式	国際協力専門員　戸田　敦義 挨拶　国際協力総合研修所　所長　長谷川　正男